

地域研究と地理学

——1990年代後半における地理学者の研究の検討を軸に——

熊谷圭知

1. 近年の地域研究をめぐる動向

1990年代以降、「地域研究」をめぐる議論が活性化している。それに並行して、地域研究を支える「制度化」の動きも目立っている。

後者についていえば、1990年代半ばから、文部省科学研究費における重点領域研究（総合的地域研究の手法確立）や、特定領域研究による大型研究プロジェクトとして、イスラーム圏、東南アジア、スラブ地域、現代中国、南アジア、などの地域研究が取り上げられてきていることが注目される。また、1994年に国立民族学博物館併設の地域研究企画交流センターが発足したこと、1998年に京都大学附設の東南アジア研究センターとアフリカ研究センターを統合する形で、大学院独立研究科として「アジア・アフリカ地域研究科」が設立されたこと、などがあげられる。また前者については、アジア経済研究所刊行の『地域研究』シリーズ（全13巻：1991～95年刊）、京都大学東南アジア研究センターの編になる『講座・現代の地域研究』（全4巻、弘文堂：矢野暢編集代表、1990～94年刊）、およびそのメンバーを中心とした「地域研究叢書」の刊行などがあげられる。上述の地域研究企画交流センターからは1997年に『地域研究論集』が創刊され、毎号多くの問題提起的な論文が掲載されている。

地理学界内部においても、この数年、これに呼応したかのような動きが見られる。1997年に、藤原健蔵の編により「総観地理学講座」の1巻として、『地域研究法』が刊行された。また1997・98年度の科研費共同研究として、「第三世界の地域像の再構築と地誌記述の革新」（代表者：熊谷圭知）が組織され、99年春の日本地理学会では、同研究グループを中心にシンポジウムが開催されるとともに、同名の報告書（熊谷編1999）が公表されている。99年秋には、日本学術会議の人

文地理研連主催のシンポジウムが、「地域研究における地理学の立場とその社会的寄与」のタイトルの下に行われ、隣接分野の地域研究の専門家をゲスト・スピーカーに招いて議論が交わされた。地理学側からは、岡橋秀典（日本の地域研究）、金田章裕（先進国の地域研究）、熊谷圭知（第三世界の地域研究）が、それぞれの立場から地理学の地域研究への貢献の可能性と課題を論じた。日本地理学会でも、小林浩二、岡橋秀典、手塚章らの中核メンバーとして、1999年4月から「海外地域研究叢書」の出版が企画・検討され、すでに3巻が刊行されている¹⁾。1999年には人文地理学会の新しい研究部会として、「アジア地域研究部会」が加わった。また人文地理の年間展望が再編されて、「地域研究・地誌」の項が生まれるとともに、新設された「特設レポート」の、初年度のテーマとして、「GIS」と並び「地域研究」（熊谷2000a）が選ばれたこと、などにその傾向を読み取ることができる。

これらの「地域研究」をめぐる議論の活性化と制度化という2つの動き、また地理学界内外における相似的な一連の動きは、相互に密接に関連していることは疑う余地がない。それは、一言で言えば、学問領域の再編成の潮流と、それに対する危機感をともなったりアクションである。

近年の「地域研究」をめぐる活発な動きには、政治的・制度的背景を読み取ることができる。日本の「国益」と国際的な地位の高まりが、国家による海外地域研究へのサポートをもたらししていること、また「地域研究」に関わる研究・教育制度の確立自体が、自己の存在意義を主張するための言説を生産していること、である。しかし、「地域研究」への注目をそれだけに矮小化することは適切ではないだろう。そこで根源的に問われているのは、おそらくは、地理学を含めた既存の学問分野と、その知の枠組みの有効性にほかならないからである。

2. 「地域研究」をめぐる動向

近年の地域研究をめぐる議論の中で、何が語られているのかをみておこう。地域研究企画交流センターの所長であり、前述の人文地理学研連主催のシンポジウムにも参加した松原正毅は、自らが主宰する『地域研究論集』創刊号の巻頭論文（松原1997）で、現在の学問が抱える問題を、際限のないディシプリンの細分化・専門化にあるとしている。そして、地域研究の可能性は、このディシプリンの枠とその限界性を認識し、その陥穽から脱却しようとする努力の上にひらけると主張している。続く論文で、立本（前田）成文は、地域研究者と自称する人々のディスコースを、そのディシプリンとの関係性において「右派」と「左派」に分類している（立本1997）。「右派」は、いずれかのディシプリンに自らの足場をおき、その理論を検証するためのデータを集める場として地域を研究するような人々、これに対し、「臨地研究」を基盤に、地域の全体的・総合的把握をめざそうとするのが「左派」である。既存のディシプリンに対しては、「右派」が「古典的な伝統主義者」であるのに対し、「左派」は「浪漫的な脱構築主義者」であると立本はいう。一方、「右派」にとって地域は操作概念であるのに対し、「左派」は「地域実在論」の立場に立つ。立本は、「右派」の地域研究を否定してはいないが、自らを心情的「左派」と位置づけ、右派的言説に固執するかぎり、真の「地域研究」の作品は生まれえないとしている。立本の言う地域の総合的把握は、これまで地理学者が慣れ親しんできた、地誌の観念に近い。しかし、立本（1999：p.336）は、「単に地域の情報を集積するだけの外国地理研究は地域研究と呼ぶ必要がない」と明言している

こうした「脱ディシプリン」的志向性の主張それ自体が、「地域研究」を新たな「ディシプリン」の一つとして確立しようとする戦略的意図を含むものと解することもできよう。また新しい地域研究の方法をめぐる松原や立本の議論は、かなり観念的・理念的な色彩が強く、地域研究の方法論が具体的かつ明快に提示され得ているとはいえない。しかし、松原や立本、あるいは国家に代わる新たな地域単位として、「世界単位」論を提起している高谷好一（1996a）らが、これまでの西欧

中心的な知の枠組みと、それを無批判に受容してきた日本のアカデミズムのあり方への批判を提起していることは見逃すべきではない。

高谷の「世界単位論」についていえば、生態学的・景観論的「本質主義」とでもいうべき地域観と、直感主義の粗さが目に付く。変貌しつつある現代のアジアの姿を視野に収めることなく、原初的な枠組みに還元してしまうことにも疑問を感じる（これについては、小林茂（1996）の書評を参照）。高谷の議論の動機付けをなすのは、国民国家——あるいは国家中心主義的地域観——への疑念と、それに対抗するものとしての、住民の世界認識を含む新たな地域観と地域区分への意思である。その意図には共感するが、「国家」の虚偽性の指摘は、けっしてイデオロギーや地域空間を規定する力として国家が果たす役割の軽視であってはならないだろう。

立本や古川久雄らの主張する「生態論理」（eco-logic）や、「エコ・アイデンティティ」の概念など、東南アジア研究センターとその周辺の研究者たちの主張には、「地域」を「自然と文化と社会を統合する有機的連関」（古川1998）として捉え、地域生態の視点から、環境破壊的な現代文明への異議申し立てを行なうという、もうひとつの問題意識が含まれている。そこには、今西錦司—梅棹忠夫とつながる「京都学派」の志向性の伝統を読み取ることもできる。またこれは、古典的な地理学が内在していた視点・方法に近似している。そこには、京都学派の「地域研究」者たちの所論が帯びるある種のナイーブさ（文字通り「自然化」する）に対する批判を含め、地理学者の「地域研究」をめぐる議論への積極的な参加の必要性和「貢献」の可能性とが存在すると考える。

松原、立本、高谷らの所論をいわば「地域実在論」の立場からの積極的な地域研究肯定論として捉えるならば、地域研究をめぐる言説が、こうした立場だけからなされているわけではないことに注意しておく必要がある。『地域研究論集』第3号では、「帝国日本の残像——帝国研究と植民地学——」という特集が組まれ、地域研究を実践する主体の「位置性」、およびその「表象」行為が孕む権力性が、「地域研究」のあり方への根源的問い直しを含めて、論じられている。地域研究と植民地人類学との関係を、兵要地誌にも言及しながら語る中生勝美（1999）の論考、北海道の「地域史」

を歴史学者の「立つはずの」視点とその欠落から語る上村英明（1999）の論考、第三世界地域研究の「訓練場」としての「沖縄」、すなわち、戦前からの連続性を否認しつつ、アメリカが創造した統治の学としての「地域研究」を通じて新たに沖縄に出会うことの意味を問う、富山一郎（1999）の議論に共通するのは、それらが過去の反省にとどまるものではなく、現在に通じる問題であるという視点である。日本民族学の研究枠組みのゆらぎが、ポストコロニアル批評や民族誌記述の批判といった「外的要因」ばかりでなく、斯学における戦後日本の歴史認識の欠如という「内的要因」にもあるのではないかとする中生の主張は、民族学をそのまま地理学に置き換えても、よりよく成立するはずだ。

この特集の企画者である臼杵陽（1997）は、別の場所で、地域研究者による他者表象のあり方が含む問題性を、イスラエル政治社会研究について論じている。そこでは、シオニズムの言説における「他者」としてのパレスチナ人の抑圧と周辺化の歴史から、それらを乗り越えようとする新たな「批判的社会学者」や「批判的政治経済学者」、一部の人類学者たちの議論が詳しく紹介されている。その中で臼杵は、こうした新しい動向に対し、それらを「予言的に示唆した」先駆的な業績として、故大岩川和正のイスラエル研究（大岩川1983）に注目し、それを高く評価している。

こうした議論をいわば、「構築主義的」な地域論、および地域研究主体の位置性をも問題にする批判的地域研究の言説として捉えるならば、それは、発話の位置と支配者—被支配者の間の重層的な関係性を問い直そうとするポストコロニアリズムの議論に重なる。このように、地域研究をめぐる近年の言説が、ディシプリンの脱構築という点において共通の方向性を持ちながらも、いわば地域の「存在論」への認識において、対照的な位相を含むことを確認しておく必要があるだろう。

3. 「地理学者」による近年の第三世界地域研究の動向

さて、これまで紹介したような「地域研究論」には、残念ながら「地理学者」はほとんど参加していない。しかし、それは、地理学者が「地域研究」の実践にかかわっていないということを意味する

ものではない。むしろ、個別研究のレベルでみれば、90年代後半における地理学者による海外を対象とした地域研究はむしろ、それまでになかったほど活発な成果を挙げている。ここでは、筆者の力量と関心にしたがって、言及する範囲を、もっぱら「第三世界」（非西洋世界）を対象とした研究に限ることにし、先進国を対象とした研究は省くことにした。また「地理学者」の範囲については、もっぱら制度的な区分、すなわち（日本の）地理学会を活動の場としているかどうか、という点に拠っている。以下、地域別に研究の動向と成果を見ていく。

(1) 東アジア

まず、特筆すべきは、モンゴル地域研究の第一人者である小長谷有紀が、国立民族学博物館における「大モンゴル展」のための企画、および長期にわたる現地踏査、コンピューターを駆使した映像資料の作成（小長谷1998a；小長谷・楊1998）という大事業を見事に成功させたことであろう。小長谷（2000）は、マルチメディア民族誌が、最新の情報による更新が可能であり、研究者がその研究過程を提示していくという「同時性」の利点と、記述の体系性や「著者性」が犠牲にされるという問題点を併せ持っている、指摘しているが、これは、現代における新たな地誌記述の手法が持つ可能性と問題を先駆的に提示している。小長谷はまた、自らの蓄積してきた遊牧—牧畜文化研究についても、動物資源観からみた狩猟と遊牧との連続性（小長谷1994b）、母子関係への介入（小長谷1999b）、乳加工の体系（小長谷1997）、経済格差（小長谷1994a）、など様々な視点からその集大成と深化をはかっている。小長谷は、こうしたアカデミックな研究成果と同時並行して、モンゴル地域研究者として、一般読者に向けた（しかしけっして片手間ではない魅力的な）メッセージを発信し続けている。小長谷編（1997）は、入門書として書かれてはいるが、様々な立場のモンゴルの人びとの語りを散りばめたその構成には、地域研究者の一方的な表象に終始しがちなこの種の書とは異なるまなざしを感じる。

水野勲（1998）が指摘するように、植民地時代の朝鮮半島に関する研究の蓄積に比べ、戦後日本の地理学者による韓国・朝鮮研究はきわめて乏しい。水野は、日本の地理学界における韓国研究が、

韓国からの留学生の貢献によって支えられており、それらの研究の多くが計量地理学的手法を用いたものであること、を指摘している。水野は、自身の反省を含めて、戦後日本の地理学界の韓国研究における「歴史」の捨象の傾向を批判し、韓国を含めた途上国研究における「残差からの問いかけ」の必要性を提起している。一方で、近年、こうした傾向を脱し、現代の韓国の社会問題をテーマにした論考が生まれてきている（金1995、李1997、若林1998）。中でも、金料哲は、日本農村との比較の視点を軸に韓国農村の「過疎化」やその発展可能性を論じ、農村コミュニティを基盤とした内生的発展の重要性を指摘しており興味深い（Kim 1999）。歴史地理的研究としては、風水地理説から朝鮮半島における地理認識に迫った渋谷（1995；1997）の研究がある。

「中国学」の長い伝統をもつ中国においても、戦後の人文地理学者による実証的な研究は手薄である。秋山元秀（1998）は、中国の体制の中で外国人研究者による臨地研究やデータ収集が困難であったこと、調査にあたっては中国側研究機関とのパートナーシップが条件となるが、中国の地理学において、集落地理や社会地理関係の関心が欠落していたこと、を指摘している。吉野正敏編（1997）『熱帯中国——自然そして人間——』は、海南島・西双版纳地区についての自然地理学者を中心とした地誌である。白坂蕃、市川健夫らの人文地理学者も加わっているが、副題が示すとおり人間の問題は「従」であるという印象を受け、静態的な記述にとどまるか、土壌など自然環境に与える人間活動の影響が触れられるにすぎない。その中であって、許衛東の「海南島の農業」は、制約の中で現代的課題や近年の変化についても論じており、興味深い。人文地理学者の中国研究の中で、比較的研究の蓄積が見られるのは、経済地理学的研究である。郷鎮企業研究の蓄積を持つ上野和彦（1997）の書は、現代中国の経済地理について手際よくまとめたテキストである。巻末の文献目録が、著者のホームページ上で更新される仕組みになっているのも親切である。このほか、ハイテク地区の実態を調査報告した張志偉（1999）の研究がある。

中国農村研究については、小島泰雄（1996；1998）が現地調査に基づきながら、着実に成果を積み上げている。変貌著しい中国の都市について

は、小野寺淳が珠江デルタ地域の都市形成を中心として、近年精力的に研究を行なっている（小野寺1997、Onodera 1998；1999）。一貫して中国の少数民族地域の問題に取り組んできた松村嘉久は、「民族自治区」の設立の歴史的過程（松村1997）、少数民族観光（松村2000）から、中国の「国民国家」形成とその矛盾を捉えようとしている。

藤田佳久による、戦前の東亜同文書院学生の中国調査旅行の記録の掘り起こしは、当時の日本人学生の中国理解とその形成過程を知る上で大変貴重な仕事である（藤田編1994；1995；1998；1999）。そこから浮かび上がってくるのは、藤田（2000）が述べるように、苛酷な条件の中での、まさに身体性に根ざした中国の体験が、そこに参加した学生たちにとって、日本ナショナリズムの相対化の契機とさえなりうるほど大きなものであったという事実である。藤田の仕事は、中国と日本の間にあり得たかもしれない歴史の可能性をも想起させる植民地史研究となっている。

日本の植民地空間は、日本の地理学者がまだ本格的に取り組み始めたばかりのテーマだが、注目すべき研究がいくつか生まれている。中でも台北市の都市計画と都市形成の過程を、統治する者と統治される者の間から論じた葉（1994）の研究が注目される。渋谷は、越沢明の枠組みを援用しながら、都市計画の実験場として植民地都市を捉える視点を提示している（渋谷1997）。このほか樺太植民地の中心都市豊原の都市形成を仔細に分析した三木（1999）の労作もあるが、今後、日本人研究者が日本の植民地空間研究を行なう場合の発話の「位置性」については、もっと学界全体で論じられる必要があるのではないか。

(2) 東南アジア

大阪市立大学経済研究所の監修になる、アジアの大都市シリーズが、3冊刊行されたことが注目される。いずれも、変貌著しい現代の東南アジアの巨大都市を、学際的な共同研究として多角的・実証的に描き出す、現代的な都市誌となっている。クアラルンプル・シンガポール編の生田真人、ジャカルタ編の小長谷一之が、それぞれ共編者となっているのをはじめ、執筆には、多くの地理学者が加わっている。本シリーズは、大阪市大経済研究所の70周年を記念した、多分野の研究者による共同研究プロジェクトであり、長期にわたる

研究会を重ねた上で執筆がなされている。そこでは、これまでの途上国都市の支配的パラダイムであった、「過剰都市化」論——雇用機会を上回る都市人口の増大が様々な「問題」を生み出しているというネガティブな都市発展の見方——を脱し、近年のアジア経済の著しい成長の中に都市を位置付けようとする視点が提示されている。それは、グローバルな都市システムに着目すれば「世界都市」化論であり、ローカルな空間においては、McGee & Robinson (1995) の提起した「メガ都市圏」あるいは拡大巨大都市圏 (Extended Mega Urban Region) すなわち都市空間の外延的拡大である。これらの都市に関する新たなキー観念の提唱には、もともと欧米の地理学者が大きく関わっており、空間的な視点が強く反映されている。こうした動向が、都市研究への地理学者への貢献の評価と期待につながったともみることができよう。分析手段としての地図の多様、「景観」や都市空間の変容が重要なテーマとなっていることなど、本書の基本的な構成や内容にもそれは反映されている。バンコク編においては、都市景観の歴史的形成とその変容を語る友杉孝 (1998)、大手流通資本の地方進出からバンコク—地方都市間関係を描く遠藤元 (1998)、ジャカルタ編においては、独立後の都市景観の変容を通じて都市社会の構造の変化を描き出す瀬川真平 (1999)、都心空間と郊外空間の発展と変容を描く小長谷一之 (1999a)、70年代のカンボン改良事業と90年代以降の都心空間の拡大の中でのカンボンの変化を語る澤滋久 (1999)、クアラルンプール編では、その都市空間の展開を多核的都市圏の形成というキーワードで語る生田真人 (2000)、マレーシアの工業開発政策と外資系企業の進出を論じる石筒覚 (2000)、都市中間層の成長と郊外住宅地の形成を追う高山正樹 (2000)、マレー人の居住分布を住宅供給と民族間関係から考察する永田淳嗣 (2000)、メガ都市化と都市景観の「美化」の動きの中でのスクォーターの「再定住」政策とその問題点を論じた藤巻正己 (2000)、いずれの論考も、空間への着目と実証への志向を共有している。これは、都市という複雑な対象—現象への学際的な共同研究の中での、地理学者の一つのスタンスと見識を示すものといえよう。

川端基夫の『アジア市場幻想論』(1999年)は、日系小売企業のアジア都市進出が直面する問題点

を、聴き取りを通じて明らかにしている。川端が指摘するのは、アジアの経済成長と「都市中間層」の形成といった普遍的な「幻想」よりも、政策的・制度的要因、インフラ条件、社会経済的条件などの個々の市場の「フィルター」が作り出す構造の相違が、企業の成功可能性を規定している、という点である。そこには、経済学者や経営学者が見落としがちな、空間的視点と立地戦略の重要性、および地域間比較の視座が見事に提起されている。

地理学者による地域研究の可能性に、地域間の連関と比較という方法がありうるとすれば、アジアと大阪の結びつきを多角的に論じようとする大阪市立大学編 (1996)『アジアと大阪』は、貴重な企てである。しかし退官記念論集という制約もあり、残念ながらその意図は十分に達成されていない。その中では、クアラルンプールにおける日系小売企業の進出が、イギリス系の企業を排除し、華人系企業に対抗する上で、マレー人のための都市開発に不可欠だったという生田 (1996) の指摘、「世界都市」化と「アジア都市性」のコンフリクトについて触れた張 (1996) の論考が興味深い。

インドネシア研究では、長年のフィールドワークに基づく実証的な地域研究を続けてきた経済学者の水野広祐が、『インドネシアの地場産業』を刊行した。水野の書は、華やかな経済成長の陰に隠れがちな、農村工業の実態と可能性を、面接調査を含む膨大なオリジナルデータにより明らかにした労作であり、地域研究の厚みを感じさせる。瀬川 (1995; 1997) は、都市公園と「地域文化」をそれぞれ、国家による上からのナショナリズムの表象として読む視点を提示している。小長谷一之は、「FDI (海外投資) 型新中間層都市」という概念を提示し、独自の視点からエネルギーに論文を量産している。澤滋久を中心とした『地理』の「ジャカルタ」特集は、澤自身のスハルト退陣時の臨場感あふれる体験記を含め、充実している。

フィリピンでは、梅原弘光が、長年にわたる同国農村のインテンシヴなフィールド調査の蓄積に基づきながら、精力的な論考を重ねている (梅原 1995; 1996; 1997a)。それらを通底する梅原の問題意識は、フィリピン農村の「近代化」= 農業の商業化や農地改革が、農民にどのような結果をもたらしたのかという点にある。梅原の方法は、それをミクロレベル= 村落レベルで20数年に渡り定点調査することであり、それによって、農民の

間の階層分化の進展, すなわち一部の向上農家層と零細農家・借り入れ耕地農家・農業賃労働者世帯との間の格差が明確になったことが綿密に明らかにされている。このほか, 行政資料に基づきフィリピンの地域開発政策と地域間格差を論じた貝沼恵美 (1999) の研究がある。

タイ研究でも, 特筆されるのは, その先駆者でありなお現役で研究を続けている友杉孝が, やはり4半世紀にわたって一つの村を追い続けた成果を出版していることである (Tomosugi 1995)。友杉は, バンコクの都市景観を歴史的に蓄積された記憶の表象として描く視点を10年以上前に提示している。友杉編 (1999) は, それを含む東洋文化研究所の『東洋文化』の特集号の諸論文を再提示したものである。その執筆者には, 友杉以外, 地理学に出自をもつ者は含まれていないが, 陣内秀信をはじめ, 豊かな空間的視点が貫かれており, 古さを感じさせない。佐藤哲夫は近年, タイの都市化とその地球環境への影響をテーマとして, 研究を進めており, この研究には, 高橋眞一, 中川聡史 (Nakagawa 1996; 1997), 木村茂らも加わっている。佐藤は, マクロレベルから, タイのエネルギー消費の変化とCO₂排出量の相関を論じ (Sato 1997), バンコク郊外住民へのサンプル調査をもとに, 住民の再生産行動が教育と関連していることを指摘している (Sato 1996)。Nakagawa (1996; 1997) は, 統計資料から, バンコクの都市内地域分化や通勤動向を論じている。高橋 (1997) は資源利用とエネルギー消費との関連から2つの人口レジーム——「人口調節」レジームと「人口転換」レジーム——モデルを提示し, それを用いてタイ東北部の人口変化を分析している。木村 (1998) は, チェンマイ近郊の一農村の調査から, 都市労働市場との関わりが農村階層によって規定され, その格差が増大する傾向を指摘している。タイの地域研究者として着実に実績を重ねている遠藤元 (1996) は, タイでの長期のフィールドワークに基づき, タイ語文献を駆使しつつ, 企業家レベルの行動にまで迫りながら, 地方経済の構造を論じており, 質の高い分析となっている。

マレーシアについては, 永田淳嗣が, ジョホール農村における土地所有と土地利用を調査し, マレー系と中国系住民の間に土地利用への態度に差異があることを指摘している (Nagata 1996)。永田は, 自らの作成した仔細な土地利用図にもとづ

きながら分析を行なっている。こうした手法は, 地理学固有のものともいえるが, 川元豊和のバングラデシュ農村での仕事 (川元 1995) などにも共通しており, そこには, 故荻口善美の影響が色濃くみられる。佐藤哲夫が荻口善美の「紙碑」で語るように, 荻口の「一筆調査」は, 並外れて徹底したものであり, コンベンショナルともみえる地理的なものの見方にこだわり続けることによって, 他分野から評価されるものとなった。そこには確かに, 地図化という方法のもつ「力」がある。同時に, 「地図化」という手法によって明らかにされた事実が, 誰によってよりよく利用され, 役立つのかという点についても, 地理学者は敏感であらねばならないと感じる。祖田亮次 (1999a, b) は, サラワクのイバン人社会でのフィールド調査に基づき, その土地所有観念の形成や労働観の変化について論じている。認識のレベルにまで踏み込んだ点で, 地理学者によるこれまでの農村調査とは異なる新鮮さを与えるが, 同種の文化人類学者の仕事を超えるためにも, 今後, ローカルな人々を取り巻くより大きなコンテクストの考察にも磨きをかけることを期待したい。藤巻正己は, クアラルンプルのスクォーター集落の生活世界とそれに対する研究者を含めた「外部者」の視点を問題にし続けている (藤巻 1996; 1998; 2000a)。江口信清編 (1998) や山本勇次編 (2000) の共同執筆者の多くは文化人類学者であるが, そこには方法・視点において差異が見られる。他の執筆者の多くが, 「貧困」への人びとの主体的認識や対応について詳しく語りながら, 彼らを析出する構造や政治的権力の問題に触れていないのに対し, 藤巻はその両者を視野におさめようとしている。こうした地理学者の複眼的志向性は重要であろう。このほか, 企業へのアンケート調査に基づきながら, マレーシアの工業団地開発と立地企業の選択要因行動を論じた, 石筒覚 (1998) の研究がある。

インドシナ3国とビルマ (ミャンマー) については, 研究が少ない。その中で, 東村 (1999) は, ミャンマー国境地域の状況と, そこにおいて自らが関わる日本のNGO活動と今後の課題について紹介しており, 貴重な報告である。このほか, 開発と環境の関係については, 安食和弘が, フィリピン, ベトナム, タイを対象に, マングローブ林の伝統的利用と, 近年の開発・破壊の実態について, 地域住民からの聴き取りをまじえて考察して

おり、注目される（安食 1997；Ajiki 1999）。

野間晴雄は、東南アジア（タイ、ベトナム）と、南アジア（バングラデシュ）、東アジア（中国）という広範囲の地域の農村において調査体験と知見を持つが、その視野の広さにも驚かされる。研究テーマは、歴史地理学的研究（野間 1999a）から、経済改革にともなう変化（野間 1999b）、農村開発をめぐる問題（1995b；1999c）まで、きわめて多彩である。しかし、そこには、野間独自の方法が通底している。それは、文献史資料の丹念な解説およびフィールドでの観察と一次データにもとづく、地に足のついた「実証」の姿勢である。それに基づいて、政策や応用の分野にも議論を提起しようとする野間の態度は、地理学者の地域研究の一つのあり方を示すものだろう。

（3）南アジア

広島大学のインド研究は、1967年以來の長い歴史を持つが、岡橋秀典を中核にして、さらにその生産力を増大させ（岡橋 1997, 1999ほか）、精力的な若手の研究者を多数輩出している。自動車工業の展開と地域構造の変容をテーマとする友澤和夫（友澤 1998；1999）、長距離青果物流動を検討する荒木一視（1999a）、灌漑水利システムから農村の生活とその変化を論じる南埜猛（Minamino 1995；1997）らの研究は、国内での同一テーマでの研究の蓄積の上に展開されている。州政府の開発政策が、階層により異なる利害と結果をもたらすことを指摘する森日出樹（1997；1999）、グローバルな力がローカルな空間に与える影響を、都市近郊や工業団地近接農村を事例に検証する澤宗則（1999a, b）らがインド社会の現代的課題に迫る一方、木本浩一は、王侯都市（木本 1995）や、南インド農村における職人の歴史社会構造を論じ、独自の歴史的な視点を提示している。岡橋自身も、長年の日本山村の調査研究に基づく関心をふまえながら、トライブと森林依存経済の分析を行なっている（岡橋 1995）。

期待されるのは、これらの多彩な研究が、個別実証研究としてのみならず、全体として現代インドのダイナミックな地域経済—社会の全体像を提供してくれることであろう。1967年に同グループが調査を行なった村落を再訪して比較調査を行ない、インド村落の変貌ぶりを記述した村上誠編（1999）『現代インドの農村——その四半世紀の変

貌——』は、長期にわたるエクステンシヴな調査の強みを感じさせるが、25年間を経たインド農村像の変化をどう総合的に提示し、意味付けするかという総論が付されていないのを残念に思う。

広島大のインド研究メンバーの中では、中里亜夫が、家畜飼養の問題に焦点を当てながら、現在も精力的に実証研究を続けている。中里が強調するのは、牛乳増産と流通改革をめざし、インド政府が国際的な支援を受けつつ実施したオペレーション・フラッド計画による「白い革命」が、確実にインド農村の貧困を減じ、新たな農村像を作り出しつつあることである（中里 1998；1999；2000a, b）。

バングラデシュについては、野間晴雄（1995b）が白らの専門家としての体験を軸に、開発協力と研究者の役割について語っており、多くの示唆を与えてくれる。地理学者がどこまでそうした実践に積極的に関与し、提言を行なっていけるかが、地理学の社会的評価につながると考える。この点で、地理学会の1998年度のシンポジウム「途上国開発と地理学」は、時宜を得たものであろう。

ネパールについては、小林茂が、マラリアに対する文化的・生物学的適応（小林 1996）から、都市廃棄物問題（小林 1999）まで多彩に論じている。『運命論』という一冊の書をめぐるネパール社会の波紋を描く「ネパールの低開発と知識人」（小林 1998）は、ネパールの低開発の内的要因としてのヒンドゥー・イデオロギーやカースト制・官僚制度批判が、エリートである高カースト知識人のあり方への批判につながるネパール社会の構造、「知識人の責任」、さらに先進国の途上国開発へのかかわりのあり方など、多くの問題を喚起する論考である。ネパールのもうひとつの開発としてのツーリズムの現状と問題性については、森本泉（1998；1999）が、丹念なフィールドワークに基づきながら論じている。

月原敏博は、牧畜文化を軸に、ヒマラヤの生態環境と生業戦略を論じてきた（月原 1997a, b）。月原（1999）は、ヒマラヤ地域研究という枠組みから、その研究史・視点の整理と、今後の可能性を語ったものであり、これまでの地理学界では見られなかった、他分野の研究をも十分に把握・理解した上での、本格的な地域研究の展望がようやく登場したという感慨を持つ。月原は、ヒマラヤというフィールドそれ自体がもつ様々な特質や問

題——地域設定から、垂直構造に集約される環境——人間関係と文化複合、そしてその制約の上に展開する環境・開発問題に至るまで——が、各学問分野の個別研究を超えた、「地域研究」を志向させる力を持っていると指摘する。そこにおいて、月原が示唆するのは、地生態学的研究を基盤に社会経済—文化の動態を組み込んだ「人間地生態史(誌)」の視点に立った総合的地誌の可能性と、そこにおける地理学者の役割である。

(4) 中東・アフリカ

寺坂昭信編(1994)によるアンカラを対象とした共同研究の成果である『イスラム都市の変容』において、興味深いのは、中林幹夫、水内俊雄、若林芳樹らの共同研究者たちが、日本の都市地理学の手法や視点を適用した研究を試みていることである。これについては、まだ試みの域を出ていないように思うが、比較の視座による地域研究への貢献の可能性と、地域のコンテクストを捨象した「普遍的」方法適用の危険をともに感じる。寺坂の研究グループは、アンカラ調査に加え、ヨーロッパへのトルコ人移民問題へと視野を広げている(Terasaka 1998)。寺坂は、長年の経験をもとに、「トルコ調査の現状と課題」(1998a)についても語っている。西脇保幸(1999)『トルコの見方』は、地理教育への貢献をめざしたトルコ地誌としてよくまとまっている。石原照敏ほか(1999)『激動する現代世界』は、現代的な世界地誌として構想されたものだが、大地域単位の分担執筆にしては紙数が少ないのが残念である。同書には、中島茂(1999)がトルコを中心とした中東アジア世界を、藤井宏志がコートジボアールを中心としたアフリカを執筆している。

ヨーロッパ諸国におけるトルコ人移民をめぐる問題については、内藤正典が精力的に啓蒙が続けられている(内藤 1996; 1997; 1998)。内藤(1996)は、トルコ系民の目から見たヨーロッパ諸国、および出自の国への意識と態度に焦点を当てながら地域間関係の重層性を捉えようとする自らの方法を「相関地域研究」と名づけている。

イランについては、長年乾燥地域の農業・農村研究を続けてきた原隆一(1997)『イランの水と社会』が出版された。これについては、他分野の地域研究者ばかりでなく、金坂清則、赤木祥彦ら、地理学者によっても多くの書評がなされており、

内容の紹介はそちらに譲りたい。金坂(1999)は、原の「沙漠周縁地域」という概念の妥当性について詳しく検討しているが、こうした地域概念をめぐる議論はもっと積極的になされるべきであろう。

アフリカでは、都市研究に新たな成果が目につく。中でも、20年にわたるフィールドワークをふまえ、ナイロビの出稼ぎ民が、都市という彼らにとって新しく苛酷な環境をどのように「飼育慣らし」しているかを生き生きと描いた松田素二(1996)の仕事は、都市人類学という枠を越えて、日本のこれまでの第三世界都市研究の中でも、最良のモノグラフの一つに数えられよう。出稼ぎ民の日常の生活実践を主体による「抵抗」として捉えようとする松田の視座は、ジャカルタのカンボンにおける女露天商と売春婦の生活世界を描いたアリソン・マレー(1994)の仕事に共通する。しかし、マレーが、国家のイデオロギーと空間再編、および消費資本主義の浸透という二重の「権力」作用の中での主体の抵抗の限界を見ているのに対し、松田は創造的な生活実践への共感可能性を含め、主体の力をよりポジティブに捉えようとしている。上田元は、第三世界の都市インフォーマル・セクターをめぐる議論をふまえ、ケニアの零細企業群をめぐる権力と職人層の対応を、国家—社会関係として捉える視点を提示している(上田 1997a, b; 1998)。そこでは、松田が論じているような権力と都市下層住民との「抵抗」の図式が、政権支持基盤を下方に拡大しようとする権力のポピュリズム的意図に基づく職人組織化と、それに対する職人集団の側の戦略的対応として、政治・社会的により緻密に論じられている。

文化人類学者が「伝統的に」論じてきた個々の民族の閉鎖的—自足的な世界像が破綻する中で、世界システムや国家の役割とのかかわりの中でローカルな地域—民族を捉えようとする試みがなされている。池谷和信は、自らが精力的にフィールドワークを重ねてきた採集狩猟民の現在を植民地支配や国際的な毛皮交易(池谷 1997; 1999b)、国家政策(池谷 1995; 1999a)などの関連の中に位置付けて、描き出そうとしている。文献により歴史的な復元を行なう手法には、まだ精緻化の余地があるが、ローカルなフィールドワークと、グローバルな構造を接合する試みとして注目されよう。池谷は、またケープタウンの掘っ立て小屋集落を対象に、ポストアパルトヘイト下での住民の戦略

的対応を描いている（池谷 2000）。

アフリカ農村をめぐるのは、ナイジェリア地域研究の第1人者である島田周平が調査研究グループを組織し、モノグラフを編む（Shimada ed. 1995）とともに、方法論をめぐる積極的な議論を提起している（島田 1995；1999）。島田（1999）は、「脆弱性」や「エンタイトルメント」（個人の社会的に賦与された物に対する支配力）といった関連する議論にも触れながら、多彩な広がりをもつポリティカル・エコロジー論の基本概念とその発展を詳しく紹介・検討した、すぐれたレビュー論文である。島田が述べるように、農業生産も農民にとって一つのエンタイトルメントの利用にすぎないとすれば、チャンネルの多様化のために、資金が農業投資ではなく社会組織に向けられたり、都市に移動したりするという、第三世界に遍在する現象も、主体の合理的選択として理解可能なものとなる。島田は、同論の問題点として、自然環境の問題が矮小化される傾向、ローカルな実態調査を解析する一般的方法論の欠如を指摘している。これについては、この視点を意識した地理学者によるフィールド調査の蓄積と方法論の精緻化の為の議論が期待される。この点で、注目されるのは、エチオピアでの長期のフィールドワークに基づきながら、焼畑農耕のシステムと生態環境を論じた佐藤廉也（1995）の仕事である。佐藤は、別稿（Sato 1997）で政治社会的・歴史的視点への感受性も示している。佐藤（1999）は、熱帯における焼畑研究に関する丹念なレビューを行なっているが、そこでは、単に先行研究の整理・検討にとどまらず、ローカルな生態環境を、それを超えるグローバルな経済システムとの関連で捉える必要性を指摘している。佐藤が構想するのは、生態的構造と歴史的文脈を交差させるような、ポリティカル・エコロジー（政治生態学）につながる研究視点である。

（5）ラテンアメリカ

東京教育大から筑波大へと続くブラジル北東部研究も、1966年以来的の研究史を持ち、その成果は、これまでに膨大なモノグラフや報告書として刊行されてきた。そうした研究成果を、一般読者向けの著書として編集したのが、斎藤功・松本栄次・矢ヶ崎典隆共編（1999）による『ノルデステ』である。歴史と風土にはじまり、製糖業、牧畜、

農業経営と土地利用から都市社会にまで、その記述は多岐にわたるが、単なる網羅的地誌に終わっていないのは、これまでの著者たちの長年にわたるフィールド調査と研究の蓄積が奥行きを与えているからであろう。本書では、ノルデステの脆弱な自然環境に対し、家畜の放牧や農耕的土地利用といった人間活動がどのような影響を与えてきたかを、地生態学的に解明することがめざされている。地生態学的手法は、自然地理学者と人文地理学者の共同作業に基づく地域研究の成果が発揮される可能性をもつ方法としても期待される（1999年3月日本地理学会シンポジウムでの松本栄次のコメント）。ただ本書では、土地利用状況を規定する政治・社会構造については、深くは追究されない。たとえば、アグレステ地帯において、大地主（ファゼンデイロ）と小作人（モラドール）との間の暴力的対立と、前者による後者の排除という、先鋭的な政治的・社会的対立の図式が存在することが記されながら、それが土地利用のあり方とその変化をどのように規定し、それは地生態系にとってどのような意味をもつ（どう評価される）のか、あるいは、ローカルな地生態系を越える政治的・経済的営力をどう視野に収めるべきか、といった点については、十分論じられていないのが残念である。牧場を追い出され、土地なし農業労働者となったモラドールたちの顔が「けっして暗くない」という著者たちの印象が、単なる願望以上のものとして説得力をもちうるためには、地域の環境を俯瞰するだけではなく、都市や他地域との関係を含む農民たちの生存戦略の解明がもっと主体の側に肉薄して行なわれねばなるまい。それは、地生態学と政治生態学との接近につながる方向性であるように思われる。

都市については、長年ラテンアメリカ都市研究を続けてきた幡谷則子（1999）の『ラテンアメリカの都市化と住民組織』が光彩を放つ。ラテンアメリカの都市化についての類型論からはじまり、各国の都市行政と都市問題、さらにボゴタの大衆居住区の住民組織と住民運動と、グローバルからナショナル、ローカルレベルまで、また構造と主体との関係をフィールドワークをふまえながら仔細に描いた労作である。

小池洋一ほか（1999）の編著による『図説ラテンアメリカ』は、ラテンアメリカ諸国の現状を開発とのかかわりにおいて総観した一般読者向けの

概説書である。長年の地域研究をふまえた著者たちによる記述の水準は高く、地理教育の教材としても多くの有用で貴重な情報を提供してくれる。同書については、木下雅夫による詳細で要を得た書評がある。同書の執筆者に加わっている福島義和(1999)は、ブラジルのクリチバ市を事例に、「エコ・シティ」としての数々の実験的試みを紹介しており、興味深い。木下(1998)は、プランテーションをめぐる石塚(1991)の図式を援用しながら、ホンジュラスのバナナプランテーション景観へのまなざしの考察の可能性について語っている。先住民運動とそれを取り巻く構造的問題については、小林致広(1995)が鋭利な考察を行なっている。

石塚道子は、カリブ海研究の第一人者として、構造への深い理解と主体への鋭い洞察を接合させながら、独自の論理を展開している(石塚1994; 1997a)。石塚が強調するのは、世界システムにおいても、民族の「伝統的」文化という点でも、「周縁」でしかあり得ないはずの、カリブ海の人々のクレオール文化が、それゆえに、「多様な文化が複合し絶え間ない変容を遂げる新たな適応の集合体」として、動態的な文化創造過程をうみだしていることである。石塚(1997b)では、マルクス主義フェミニズムの視角から、カリブ海地域の小白宮農民女性のもつ「地域維持力」が論じられるが、そこでは、再生産領域の労働を家父長的な核家族世帯の枠組みから切り離し、多様な世帯の柔軟な共同化に委ねるといふ、「そのようにしか生き延びられなかった」がゆえに創造された彼女たちの実践が、むしろ新たな可能性をもつことが語られている。

(6) 太平洋島嶼

オーストラリア、ニュージーランドを除く、太平洋島嶼地域の研究は、日本では、もっぱら文化人類学者、および自然人類学者や考古学者によって担われてきた。文字史料の欠如が歴史学者を、国家規模の小ささが経済学者を遠ざけてきたのは、理解できるとしても、これまで地理学からのアプローチが少なかったことは、不可解というしかない。その中であって、故藪内芳彦の導きによって、サモアを中心に、1965年という早い時期からフィールドワークに基づくポリネシア研究を手がけてきたのが、杉本尚次である。杉本(1997)は、

(西)サモアにおける近年の社会変容と伝統文化の再認識の動きを紹介している。杉本の研究対象は、日本およびヨーロッパの民家から、博物館、野球に至るまで、実に多彩であるが、杉本(1996)『地理学とフィールドワーク』では、自らのフィールドワークの遍歴と方法が綴られており、興味深い。かつて『メラネシア——伝統と近代の相克——』(1992, 大明堂)を著し、地域研究における「場」の論理を提唱した橋本征治は、関西大学とハワイ大学の共同研究プロジェクトを取りまとめ(橋本編1998)が、自らも太平洋島嶼地域におけるタロイモ栽培を比較し論じている(橋本1998)。松本博之は、トレス海峡の調査研究をさらに体系化して再提示するとともに、認識の世界にまで踏み込んだ独自の世界を構築している(松本1997a; b)。

パプアニューギニアについては、熊谷圭知が、ポートモレスビーの移住者集落の調査研究を続けているが、近年、首都の都市空間整備と都市美化が進められている中で、これらの集落に対する「圧力」が強まっていることを報告している(熊谷1999a)。また熊谷は、パプアニューギニア高地周縁部の村でのフィールドワークに基づきながら、人々が西欧世界との接触以前においてもダイナミックな移動と集団の再編成を続けていたこと(Kumagai 1998b)、第二次大戦中の日本兵との関わりや近年の「秘境観光」を通じて、グローバルな力にさらされ、それが人々の間に葛藤を生み出していることを語っている(熊谷2000)。熊谷(1999a, c, 2000)は、こうした状況を眼前にした調査研究者が取るべき位置性についても問題を提起している。

田和正孝の『変わりゆくパプアニューギニア』(1995年)は、南部海岸の漁村に住み込んだ著者が、漁業活動と人々の生活の変化をつぶさに、生き生きと描いた、すぐれたフィールドワーク記録である。田和の視線は、単に伝統的漁業活動や漁撈技術に向けられるだけでなく、ナマコ漁といった外部から持ち込まれた営為との関係の中でいかに変化し、ローカルな資源利用のあり方に問題が生じているかを鋭く指摘している。田和が、パプアニューギニアやマレーシアの漁村を訪れるきっかけとなったのが、オセアニアを研究する生態人類学者の秋道智彌との共同研究であった。秋道(1998)が編者となった『海人の世界』は、歴史

学、文化人類学、考古学者との共同研究の成果であり、故鶴見良行も加わっているが、海からオセアニア・東南アジア世界を見るという斬新な視点に貫かれている。海から眺めたとき、オセアニアと東南アジアの境界は流動的であり、海は地域を隔てるものよりむしろ繋ぐものである。そこから逆に炙り出されるのは、われわれの陸地中心主義的な世界観・地域観の問題性である。秋道と田和の共同執筆による書（秋道・田和 1998）にも、多くのことを教えられる。オセアニアを海から捉える必要性については、大島襄二（1999）も主張している。

久武哲也をハワイ研究者と呼ぶのはふさわしくないだろうが、久武（1999／2000）は、ハワイ移民という歴史的「出来事」に、日本の海外移民政策、排他的人種主義、植民地支配、地政学を見事に重ね合わせて論じきった傑作である。過度に観念的だったり、西欧の知を脱構築するといいつつ西欧中心主義的な志向性を色濃くもつポストモダン主義の議論を超えた、真のポストコロニアルな地域研究の可能性を示していると感じる。日本の移民研究としては、30年以上にわたりこのテーマをライフワークとして取り組んできた、石川友紀の『日本移民の地理学的研究』（1997年）が出版されたことを喜ぶたい。丹念で緻密な調査に基づいた石川の研究は、日本移民史の復原にとどまらず、多数の移民送出地域についての詳細な考察を含み、「相関地域研究」と呼ぶにふさわしい。

4. 地域研究と地誌

内藤正典（1994）が「地誌の終焉」を語った後、皮肉なことに、日本の地理学界における地誌をめぐる議論は活発になっている。そこには、森川洋（1992）がかつて紹介したような欧米の地理学界における「新しい地誌学」の動向も影響しているが、むしろ積極的な問題提起は、第三世界の地域研究に関わってきた地理学者たちからなされている。

1995年に、広島大学総合地誌研究資料センターが主催したシンポジウム「地誌学とエリアスタディー」では、森川洋、岡橋秀典、米田巖がオーガナイザーと座長を務め、堀信行（「地誌学的志向と地誌学の可能性」）、手塚章（「フランスにおけるコレーム地理学の展開とその問題点」、熊谷

圭知（「第三世界の地域研究と地誌学」）、中山修一（「地誌学と地域研究の在り方についての日本的解釈の問題」）らに、高谷好一（「エリアスタディの現状と課題」）も加わり、地域研究の方法と地誌のあり方について活発な議論が交わされた。

このシンポジウムの冒頭で、オーガナイザーの1人である森川洋は、1) 地誌学への社会的要求とは何か？ 2) 地誌学の研究視点と内容はどのようなものであるべきか？ 3) 地域はどう捉えられるべきか？ 4) 地誌学と隣接科学との関係はどうあるべきか？、という4つのテーマを掲げている。シンポジウムでは、もっぱら堀が2)・3)、手塚が2)、熊谷が2)、4)、中山が1)、2)、高谷が3)に関わって、議論を提起している。

広島大のインド研究の初期からのメンバーであり、地誌や地理教育の問題に専門的に関わってきた中山は、地理学において「地誌（学）」という言葉が、日本の地理学者の間で共通理解のないまま、著者によって恣意的に様々な意味合いに使用されてきたことを指摘している（中山 1996）。そこで、中山は、「地誌」の用語が、地理学研究者のサークルのうちにおける隠語に過ぎなかったのではないかと、また地域研究の本家は地理学にあり、というのは地理学界の思い込みに過ぎなかったのではないかと、という問いを発している。中山によれば、地誌の目的は、地域や住民のアイデンティティを明確にすること、にあり、問題解決型・問題発見型の「地域研究」とはその性格が異なることになる。中山は、別に『近・現代日本における地誌と地理教育の展開』（1997年）を著し、地理教育に地誌が果たしてきた役割を詳細に歴史的に検討している。そこでは、国家によって定められた地理教育の目標の中で、地誌が与えられてきた重要性和その役割が、明治時代から現代にいたるまで本質的には不変であり、（外国）地誌を学ぶことは最終的には、主体（日本人）としての自覚を促すこと、に結び付けられてきたことが語られている。

熊谷（1996）は、中山と同様、地誌が地理学者による閉鎖的サークルの中で作られ、流通してきたこと自体が、地誌を魅力のないものとしてしまっていると現状を批判する。そして、地誌と地域研究を対照する図式を提示し、地誌が国民国家による国民のための自己理解の手段であったのに対し、地域研究が第一世界にとって「扱い難い他者」

としての第二・第三世界を理解可能なものにするための学として発展したと述べる。熊谷が問題視するのは、地理学における地誌と地域研究の乖離である。すなわち、地理学界の外において、本格的な地域研究が蓄積される一方、地理学界内部では、地誌が軽視されると同時に、地域研究(者)が「周縁的」な存在にとどまり、地誌記述が本格的な地域研究に裏打ちされたものになりえていないという状況である。熊谷は、戦後日本の地理学者の第三世界地域研究をレビューした展望論文(Kumagai 1998)において、その研究史を3期に画し、その初期(1950～60年代前半)から活躍した、川喜田二郎、大野盛雄、岩田慶治といった、地理学に出自をもつパイオニア的な地域研究者の方法論や認識論が、斯学の中に継承されなかったことを指摘している。

堀(1996)は、「没場所化」が進行する現代においてこそ、場所や地域と人間の結合関係の深層を読み取り、それを活写する地誌の必要性が再認識されるべきと説く。堀が熱く語るのは、場所を場所たらしめる自然生態と社会文化の相互関係を基盤におきながら、そこに生きる人の顔が見え、その心が感知されるような「地誌」である。この主張は、堀(1997)の「『風土の三角形——生きられる「場所」の誕生——』において、より精緻に展開されている。地理学者による地域研究とその記述(地誌)が、そこに生きる人々の認識論やコスモロジーをも含みこむ奥行きを持ちえたとき、魅力的なものになるという堀の主張には共感できる。地理学者の地誌に欠けているのは、ナラティブの問題も含む表現技法と、対象への感受性(共感力)を含む、すぐれた「著者性」であろう。

広島大のインド研究の代表者を務めた藤原健蔵の編になる『地域研究法』(総観地理学講座2, 1997年)は、地理学の側からの地域研究論として注目される。同書の執筆陣には、野沢秀樹(フランス)、竹内啓一(地中海地域)、矢ヶ崎典隆(アメリカ合衆国)、秋山元秀(中国)、梅原弘光(東南アジア)、島田周平(アフリカ)、斎藤 功(ラテンアメリカ)と、地理学界を代表する地域研究者が顔を揃え、各自の地域研究論を展開している。

編者の藤原は、「はしがき」において、「エリア・スタディーズ」の台頭によって、「地域」はもはや地理学の占有物ではなくなったと述べた上で、

応地利明(1996)の「地誌研究と地域研究」を引きながら、エリアスタディーズとしての「地域研究」と、地理学者が慣れ親しんできた地誌学とは「似て非なるもの」であると語る。応地が指摘するように、「地域研究」は、第一世界の研究者による「他者としての第三世界」の研究である。藤原は、地理学者が行なう地域研究が、すなわち「地誌研究」であるとし、それは国内外のあらゆる地域を対象とするとしている(同書中には、関東地方(朝野洋一)や、尾道・京都(戸所隆)の地域研究の例が紹介されている)。藤原は、地理学における地域研究(藤原の言う「地誌研究」)の衰退は、論理実証主義地理学(地理学)の流行によって、地理学者のフィールド離れが進んだことが大きな理由であるという。藤原はさらに、前述の熊谷(1996)による地誌と地域研究の比較の図式を取り上げ、地域研究に比べ「地誌研究」への扱いが厳しく、公平さを欠くと批判している。そして、地域研究が現在抱えている問題のいくつかは、かつて「地誌研究」がその存在意義をかけて議論し、超克してきた問題であると語っている。叩き台として示したつもりの拙稿の図式の「粗雑さ」について抗弁するつもりはないが、後者については、もしそれが「地域区分」の方法や「身近な地域の学習」を通じて自らを見つめるといった点をさすのだとすれば、それは地域研究の抱える「問題」の本質を捉えそこなっているし、「地誌研究」によって超克されてはいないだろう。前述の応地(1996)の議論は、実は、熊谷(1996)よりむしろはるかに厳しく、また根源的に「地誌研究」のもつ問題の所在を指摘しているのだが、なぜか藤原はその点には触れていない。

応地によれば、「地誌研究」(地域地理学)は、主体を離れても成立する「空間の絶対主義」の立場に立ってきた。一方、近年の地域研究では、地域研究にとっての意味空間を問題にする立場、すなわち西洋近代起源の諸概念の懐疑に根ざし、「多元的な価値観の存在を根底にすえてフィールドワークの現場から考えていこうとする指向性の強まり」が存在する。応地は、「地誌研究には、この問題に関して地域研究が担おうとするような自覚的緊張は乏しい」と指摘する。地域研究が、対象とする「他者としての第三世界」との間に、支配—被支配の関係を内在させてきたことは、サイドの「オリエンタリズム」などによって厳しく

批判されてきている。しかしこのような批判からは、地誌研究もまた免れ得ない、と応地は言う。なぜなら初等・中等教育における地誌は、「いったん形成された地域観の再生産と教育に専念してきた」からである。こうした、主体と対象との間の（非対称な）関係の根底的な問い直しの要求と批判もまた、地誌研究をめぐる議論では欠けている、と応地は指摘する。これは、自国の地誌研究を通じて、他者（他地域）を「客観的」に認識するための主体の確立が果たされるという、藤原の楽観的認識とは、大きく異なっている。

何を地域研究として論じるか、また地域研究と地誌、地理学との関係をどう捉えるかについては、同書の著者たちの間でも、そのスタンスが異なる。そこには、先進国を対象とする「地域研究」（および地誌研究）と第三世界を対象とする「地域研究の歴史と位相の相違が反映されている。すなわち、自国研究を「地誌研究」として行なってきた前者と、他者によって「表象される」立場におかれてきた第三世界という相違である。「何のための地域研究か」という根源的な問いを、梅原（1997b）と島田（1997）が発しているのは、応地の言うような、先進国研究者による第三世界の地域研究が内包する非対称な関係への自覚に基づくものである。

藤原も指摘するように、地理学者の地域研究の重要な特長は、それが地誌を通じたトータルな地域像の提供と、それを通じた地理教育への還元という役割と結びついていることにある。しかし、残念ながら、これまでの地理学者の地域研究の中では、この点が自覚的に認識され、その成果が地理教育に利用可能な形で積極的に提供されることは少なかったといわなければならない。

熊谷圭知・西川大二郎編『第三世界を描く地誌——ローカルからグローバルへ——』（古今書院、2000年）は、第三世界の地域像と地誌記述の革新を通じて、地域研究者の成果を一般社会や地理教育の場へフィードバックしようとする試みである。いずれも第一線のフィールドワーカーである、池谷和信（「ポストアパルトヘイトにおける南アフリカの都市」）、瀬川真平（「カンボンのジャカルタ」）、生田真人（「植民地化の歴史から見たマレーシア都市」）、梅原弘光（「変貌するフィリピン」）、松本博之（「トレス海峡の地域社会」）、森本泉（「ネパール地域像の再構築」）、石塚道子

（「カリブ海地域の地域像」）、小長谷有紀（「モンゴル地域研究における記述革新」）、中里亜夫（「インド農村の貧困と動態」）らの論考は、地域研究の最新の成果に基づく第三世界の地域像をヴィヴィッドに語るとともに、地誌記述の「著者性」の問題や、ローカルな生活世界と主体の視点も大胆に追求されている。共編者の西川大二郎（2000）は、「地域研究と地誌とを結ぶもの」の中で、第二次大戦中に書かれた2つの地誌的著作——小牧実繁編の『大東亞地政学新論』と飯塚浩二の『満蒙紀行』——を取り上げ、批判的検討を行なっている。最終的に「第三世界」の地誌記述の課題として西川が語るのは、西欧近代的価値観の相対化である。これは、冒頭の地域研究の言説に一致する。しかし、西川の議論の重みは、日本における地誌の歴史的総括への意志と思想をふまえていることである。おそらく、地理学における地域研究や地誌の復権を唱えるいかなる議論も、真に有効性をもつためには、こうした地理学者の過去の地域研究の営為についての内在的な批判と再検討を通じることなしにはありえないだろう。こうした点で、米倉二郎らの研究を仔細に再検討した岡田俊裕（1998、1999）の仕事は、注目に値しよう。

5. 地域研究とフィールドワーク

地理学におけるフィールドワークの衰退が、藤原の言う「地誌研究」、あるいは地理学者の「地域研究」の停滞につながってきたという点については異論はない（ただし、これまでみてきたように、その状況はいまや大きく変貌しつつあることも強調しておかねばならない）。しかし、問題はどのようなフィールドワークが行なわれるべきか、であろう。

『フィールドワークを歩く』（須藤健一編、1996年）は、人文・社会科学の学問分野における「フィールドワーク」論とその具体的な手法が語られており、各学問分野でフィールドワークがどのように位置付けられているかを知る上でも、たいへん興味深い書になっている。その中で「人文地理学」の項を統括している水内俊雄（1996）は、人文地理学のフィールドワークをその手法・関心からいくつかの類型化している。そこでは、「企業・組織人型」、「生活世界人物型」、「大量集計型」、「文献・史料探索型」とならんで「参与観

察型」があげられている。そこで水内は、「この手の聞き取りを通じた研究は人文地理学では少なく……文化人類学や民俗学に一步も二歩も譲る状況にある。むしろ、人文地理学に最初は足を踏み入れていても、参与観察を徹底的に行なう研究者の大部分が、泣いた笑ったをも自らの主題としてしまう文化人類学に移行していったというのが実状かもしれない」と語っている。しかし、この認識と語りには多くの問題が含まれている。前段の事実認識は部分的には正しいとしても（しかし、川喜田二郎や岩田慶治をはじめとする京大地理学教室出身の地理学者についてはある程度あてはまるかもしれない——それでも、彼らが自ら「移行」したのか、地理学界の側が彼らの方法を認める器量を持たなかったのか、実は大きな問題であるのだが——ものの、大野盛雄・高橋彰ら、やはり参与観察を旨とした東大地理学教室出身の地域研究者の存在がまったく抜け落ちている）、後段のような言い方は、参与観察的方法の「矮小化」であるばかりでなく、他学問分野あるいはこれからフィールドワークを伴う研究を志そうとする若い世代に対し、参与観察を行なう学問分野として地理学はふさわしくないという「誤解」——と筆者は考える——を広めてしまっていることになるからである。そして、結果的に、ここに集められた人文地理学のフィールドワークの方法論が、系統地理学のそればかりになってしまっており、「何でも喰らおうとするうわばみのような関心」にもつ「地誌」的なフィールドワークが脱落してしまっていることも残念でならない。

藤原健蔵は、前述の書で、地理学者とフィールドとの取り組みをいくつかタイプ分けしている。自身の研究分野の発展のためのデータ収集や仮説検証にフィールドワークを利用する研究者（タイプⅠ）と、地域そのものに関心をもつ研究者（タイプⅡ）に分けた上で、後者をさらに、そのフィールドワークの手法によって、文献や質問紙票による調査に重点をおく研究者（タイプⅡ-A）と、「自分の持つ理論や知識すら一時棚上げして一つのフィールドに定着し、人々の日常に接触するなかから、彼らの多層的な生活が染み込んでいる舞台を本能的に嗅ぎわけ、新しい発見を生み出そうとする」タイプ（タイプⅡ-B）——藤原はここでは「参与観察」という表現は用いていない——とに区分し、「社会学や人類学のフィールドワーカ

ーにはとくにこのタイプに属する研究者が多い」と述べている。藤原は、タイプⅡ-Aを真のフィールドワークとはいえないとしながら、タイプⅡ-Bについても、その調査範囲の狭さや「代表性」に懸念があるとして、両者の長所を組み合わせたタイプⅡ-ABを（地理学にとって）理想的なあり方としている。参与観察を含むインテンシヴな調査と、より広域の地域を視野に収めようとするエクステンシヴな調査の組み合わせに、「地理学」者のフィールドワークの積極的な意義を見出すという藤原の結論自体には、異論はないのだが、気になるのは、タイプⅡ-Bの調査者についての藤原の「表象」の仕方である。現実には、文化人類学者にしても社会学者にしても「理論や知識を棚上げにして」「本能的に」フィールドワークを行なっているわけではない。前述の水内の語りとも共通する、このような表現の中に反映されているのは、このような参与観察的なフィールドワークを「異化」し、結果的に地理学の研究・調査手法の主流から——無意識のうちにであれ——「周縁化」し、排除してしまう傾向であるように思われる。

しかし、これまで述べてきたような第三世界を対象とした地理学者の地域研究の中で、参与観察的な手法はもはや特別のもではなくなっている²⁾。むしろ、地理学者のフィールドワークにとって必要なのは、社会学者の佐藤郁哉（1992）の言う「恥知らずの折衷主義」——参与観察も、質問紙調査も、文献調査も、その状況に応じて何でも活用し理解の材料とすること——ではないかと筆者は考える。

藤原がこだわる「代表性」という問題については、実は、藤原編の『地域研究法』の執筆者の中でも、微妙に意見の相違がみられる。梅原弘光（1997b）は、地域研究にとって「地域への一途な専門化」が必要条件であるが、それは容易に得られるものではなく、「研究者がそれを直接把握しうる程度の範囲に対象地域を限定して、綿密な観察と住民への聞き取りを繰り返すという接近方法」として「特定村落を対象とした事例調査」が一つの有効な方法となりうる、と指摘する。その際、問題にされる「代表性」という問題については、重要なのは、個別事例にも全体につながる何かがあり、それを読み取る側の能力の問題である、とし、それには「地域への一途な専門化」に加え、①調査事例を含む歴史の研究、②統計の利用、③類似の個別研究

との突き合わせ、という手続きが有効であると述べている。

同様に、野間晴雄（1996）は次のように述べる。「1つの村のような狭い領域では地理学の対象にはならないという風潮も根強い。しかし、この視点は、実態のある最小地域を基礎として地域あるいは単位地域として、その関係性を究明することで、地域研究の基礎単位論を構成する可能性を秘めている。スケールがミクロなだけに、野外科学的手法が当然幅を利かせる。そこからよりマクロなスケールの地域に拡大していくための手続き・検証、言い換えれば、その原理を適用できる地域を確定していく営みはもっと地域研究で議論されてもいい。いずれにせよ、「世界単位論」のような認識の大枠を議論することとならんで、メソスケールの地域研究が今後かなめになるであろうこと、それと地域研究の細胞にたとえるべきより下位のフィールド研究との往復運動の手法の開発が鍵となってくる」

必要とされるのは、他分野との共同作業の体験を通じて、地理学者の視点の欠落や問題性を直視しつつ、その手法の有効性と可能性についての議論を進化させていくこと、そしてそれと同時に、他分野の研究者が注目するような、具体的な地域研究の作品を生産していくことであろう。それは地理学が固有のものとしてきた方法や認識を相対化することにもつながる。「生態にせよ歴史にせよ、絶えず地域に固有の事実をつきつけることによって既成の理論に再検討を要求し、問題に対する自己の認識を鍛え上げる必要がある」という佐藤廉也（1999）の言葉は、まさにこうした「地域研究」の精神を体现するものともいえる。

地理学に地域研究の固有の方法や視点がありうるのだろうか？筆者は、この展望論文を執筆するにあたって、地域研究に邁進する何人かの地理学者に個人的に、この大きな問いを投げかけた。そこでは、「[地域]を相対的に考察する視点/[地域]を経済・社会・文化などと細分化した「断片の寄せ集め」としてみるのではなく、断片同士をつなぎ合わせていくこと/要素還元的ではなく、複雑系的視点」（澤崇則）「空間的な地域の把握/空間的な視点そのものを強くアピールしてこそ、他分野への貢献ができる/（単に地図を作ったり、分布図を描くということではなく）[地理的・距離的に]離れた地域がどのようにつながってい

るのか、どのように影響を及ぼしあっているのかを明らかにしていくこと」（荒木一視）「環境を絡めた地域研究/いくつかの空間レベルの研究の比較と統合/メソスケールの意味をきわめていく/生活を地域研究に組み込む/最後に残るのはやはり「資料」「データ」ではないかと思うことも近年ある」（野間晴雄）といった、ある共通性もった答えが得られた。

野間（1996）は、フィールドワークに根ざした地誌の再構築に、地理学の地域研究への貢献の可能性を見ようとし、次のように語る。「現代の地域研究に固有の領域を認めようとする立場は、平たくいえば、地域認識は時代と主体の産物であり、地域の「文化の翻訳」として、解釈学的にとらえようとするものだと私は理解している。実験科学ではなく、認識の学として、地域という「場」で、個別ディシプリンを総合するパラダイムを考えていこうとする姿勢である。人文地理学が分化するとともに、その環境論は、空間という抽象的な対象に換骨堕胎されて、傍流に押しやられていった。環境の問題が地球規模で話題とされる昨今、環境そのものの構造ではなく、環境と地域との関わりを求めてきたはずの伝統的地理学はもっと意を強くしてもよいはずなのに、活躍の場が少ないのは、上に述べたような学史的背景も一因である。とりわけ、本格的な地誌やその方法論双方の蓄積を疎かにしてきたつげは大きい。地誌こそ、現在議論されている地域研究の像にかなりの親近性を内在させるディシプリンであったはずだ。ダイナミックな地誌が成功すれば、その点で、地域の関係性を具体的・簡潔に表現しうる可能性を秘めている」

重要なことは、フィールドワークに根ざした地域に感応的なデータを積み上げ、そこから発信していくことであろう。具体的には、ローカルなコミュニティにおいて参与観察的なフィールドワークを行ないつつ、五感や身体性を通じて人びとの生活の「場所」や「環境」を直接体験する。そして、対象社会の人びととの信頼関係を築く過程を通じて、自らの認識論を反省的に鍛える努力を行なった上で、統計や文献資料/史料も、その限界をわきまえた上で積極的に利用し、他地域との間や国家を含むより大きなスケールとの関係性の中に、ローカルな場所を位置付ける、そんなありかたである。

6. 地域研究と地理学の未来

最後に、地理学と地域研究の関心のあり方、に関連して一言私見を述べておきたい。まず、地理学界における地域研究への注目と自己主張が、単に、既存の学問分野間のパワーポリティクスの中での、地理学の「地位」の確保をめざしたものであるとすれば、筆者はそのような議論に積極的に荷担するつもりはない。そうした事態は、たとえば大学における地理学と銘打った学科や教室の消失と同様、「制度」の危機にほかならない。それは、学問の内実や可能性とは別次元の問題である。もっと率直に言えば、はるか以前から進行しつつある、学問の内実の危機と、その「市場」における「地位」の低下——他の学問分野からの評価においても、また一般読者の支持という点においても（これについては、大書店における地理学の書棚の消滅あるいは文字通りの周縁化を想起するだけで十分であろう）——が、かなりのタイム・ラグを経て反映されたものにすぎないと思うからである。もし制度としての地理学の中核にいる人々が、それを深刻に認識せず、小手先の技で事態を切り抜けられると信じているならば、それは地理学界という制度の病の深さを示すものにほかならず、遠からず滅んでいくしかないであろう。しかし、それはあくまで日本の地理学という制度の解体であって、思想としての地理学のもつ可能性の終焉ではない。

これに関連して注目されるのは、近年、歴史学や人類学、社会学など、地理学に隣接する諸学問分野とそれらの織り成す境界的な領域の中で、「地域」や「空間」が積極的に対象化されていることである。たとえば、歴史学の分野における「地域史」の主張、歴史学者と文化人類学者を中心的な書き手とした「地域の世界史」（全12巻・刊行中）の企画、などにそれを見ることができる。そこには、これらの学問分野自体の再構築の潮流と、グローバル化とローカル化の同時進行の中で、観念的にも、実態としても「国民国家」という既成の枠組みの相対化が要請されている、といった現実があることは言うまでもない。しかし、残念ながら、その中に地理学者が積極的に関与・貢献しているとは言いがたい。

「空間」を媒介とした、さらにラディカル（根源

的）な、既存の学問領域の越境と再編成という動きは、カルチュラル・スタディーズやポストコロニアリズムといった潮流の中に見られる。吉見俊也をはじめとするアクティヴな思想家たちの「空間」への熱意と洞察力、新しい地理学への注目と認識は、「本家」である地理学者たちのそれを凌いでいる（『10+1』11号の特集「新しい地理学」、『現代思想』27-13の特集「変容する空間」参照）。そして欧米を中心としたそれらの研究の潮流の中では、メタファーとしてであれ、「空間」、「場所」、「景観」、「立地」（場所的定位）、「地図化」、「領域」、「境界」といった、「地理学」用語が、新たな意味を付与されつつ、多用されている。

筆者は、こうした状況を、「地域研究」への議論の高まりと、ある部分では重なり合うものとして捉えている。すなわち、やや粗削りに要約するならば、それらはいずれも近代西欧的世界観に立脚する既存の学問分野による現実世界の分断とそれによる硬直化という傾向に対し、「地域」や「空間」といった枠組みや視点を媒介とすることによって、その脱構築と再生を図ろうとする営為とみなしうるからである。それらの潮流に対し、母屋を取られたと菌噛みするのも無意味であるし、地域や空間の意味を十分に理解していないと軽蔑し、無視するのはさらに愚かなことである。それは、地理学と言う学問をますます痩せ細らせるだけだからだ。われわれがなすべきなのは、地域研究にせよ、ポストモダンの空間論にせよ、「地域」や「空間」を自らの固有の対象としてきたと信じる地理学者たちが、むしろそれを好機とみなし、自らの古い殻や袂を脱ぎ捨て、積極的にその議論の土俵に立ち、オリジナルな議論を発信していくこと（上述の『現代思想』の中の地理学者の仕事、とりわけ加藤正洋・神田孝治（1999）の論考、および久武哲也（1999／2000）の仕事などには、その力と可能性を十分に感じる）、そしてそれを通じて、「貢献」を果たすと同時に、自らを脱構築していくことであろう。そのような営為が、地理学という学問分野にフィードバックされ、それを活性化したとき、いいかえれば、「地理学化」と「脱地理学化」の2つの方向性をともに引き受け、越境し続けるような研究者が多数出現するとともに、批判的かつ建設的な討論と「異種混淆」の動きが日常化し、さらに制度としての日本の地理学界がそれを受容する開かれた「空間」へと変貌しえ

たとき、豊かな「地理学」が生まれると信じる。

[付記] 本論文はもともと、2000年の『人文地理』52巻3号の学界展望に新設された『特設レポート』の草稿として書かれたものである。しかし、その制限紙数を大幅に超過していたため、編集委員会からの助言を受け、その一部を抽出してつなぎ合わせる形で完成させたものが、熊谷（2000a）だった。人文地理編集委員会からは、全体を再構成して、新たに展望論文として投稿するよう奨められたが、筆者の怠慢でそれが果たせぬまま、今日に至ってしまった。今回、その草稿を復活させることにした最大の理由は、それを製作する過程で、多くの地域研究者の方々にご協力を依頼し、研究成果の情報や現物等をお送りいただいた返礼を果たしたいと考えたからである。現在の眼で見ると、本稿の議論には、拙い点や意を尽くしていないと思われる点も多いし、2000年以降の最新の研究動向をふまえていないという問題点もある。しかし、ここに示した筆者の基本的な見解は、現在も変わっていないし、公表する意義はあると考えた。掲載にあたっては、部分的な修正や補筆を施して全体のバランスを崩すことを避け、現在形ではそぐわない部分の記述を除き、文体も含め元の原稿を再現した。文献リストには、本文中に取り上げられなかったものを含め、草稿を著すために参照した文献をすべて掲載した。不十分ではあるが、この時期の地理学者の地域研究のデータベースとしての意義があると考えたからである。最後に、人文地理学会編集委員会には、部分的な再掲載のご承認をいただいたことを記してここにお礼を申し上げたい。

注

- 1) 宮城豊彦・安食和弘・藤本潔（2003）『マングローブ——なりたち、人びと、未来——』（日本地理学会海外地域研究叢書1）古今書院。
岡橋秀典編著（2003）『インドの新しい工業化——工業開発の最前線から——』（日本地理学会海外地域研究叢書2）古今書院。
矢ヶ崎典孝・斎藤功・菅野峰明編著（2003）『アメリカ大平原——食糧基地の形成と持続性——』（日本地理学会海外地域研究叢書3）古今書院。
- 2) 藤原自身も同論文の最後では、生活世界の把握と描写のために、参与観察法を中心としたフィールドワークの有効性を積極的に評価している（藤原、1997：p.29）。

文献

秋道智彌編（1998）『海人の世界』同文館。

- 秋道智彌・田和正孝（1998）『海人たちの自然誌——アジア・太平洋における海の資源利用——』関西学院大学出版会。
- 秋山元秀（1997）『中国における地域研究法』（藤原健蔵編『地域研究法』（総観地理学講座2）朝倉書店、pp.81-97。
- 安食和弘（1997）『マングローブからみた東南アジアの人々』（三重大学国連協力推進委員会編『希望と苦悩のアジア』三重学術出版会）、pp.235-242。
- 朝野洋一（1997）『地域研究の地域的枠組み——関東地方を例にして——』（藤原健蔵編『地域研究法』（総観地理学講座2）朝倉書店、pp.171-188。
- 阿部健一（1998）『地域生態史の視点』地域研究論集1-2、pp.6-17。
- 荒木一視（1999）『インドにおける長距離青果物流動——デリー・アザットブル市場を事例として——』経済地理学年報45-1、pp.59-72。
- 生田真人（1996）『関西系小売企業の東南アジア進出』（大阪市立大学地理学教室編『アジアと大阪』古今書院）、pp.168-196。
- 生田真人（2000a）『多核都市圏の形成』（生田真人・松澤俊雄編（2000）『アジアの大都市3 クアラルンプル、シンガポール』日本評論社）pp.3-23。
- 生田真人（2000b）『都市国家の形成』（生田真人・松澤俊雄編『アジアの大都市3 クアラルンプル、シンガポール』日本評論社）pp.221-239。
- 生田真人（2000）『植民地化の歴史からみたマレーシア都市——「複合民族国家」の都市再編——』熊谷圭知・西川大二郎編（2000）、pp.71-88。
- 生田真人・松澤俊雄編 大阪市立大学経済研究所監修（2000）『アジアの大都市3 クアラルンプル、シンガポール』日本評論社。
- 池野旬・武内進一編『アフリカのインフォーマル・セクター再考』アジア経済研究所。251p。
- 池谷和信（1995）『ボツワナの僻地開発——カデ地区の道路工事・民芸品生産をめぐる——』アジア経済35-11、pp.54-69。
- 池谷和信（1997）『イギリス植民地ベチュアランドにおける毛皮をめぐるエスノネットワーク』社会人類学年報23。
- 池谷和信（1999a）『シベリア北東部におけるチュクチのトナカイ牧畜と放牧テリトリー』北海道立北方民族博物館研究紀要8、pp.1-30。
- 池谷和信（1999b）『狩猟民と毛皮交易——世界経済システムの周辺からの視点——』民族学研究64-2、pp.199-222。
- 池谷和信（2000）『アパルトヘイト撤廃後の南アフリカ都市——スコッター社会からみたケープタウン——

- 一」熊谷圭知・西川大二郎編 (2000), pp.27-49.
- 石川友紀 (1997)『日本移民の地理学的研究——沖縄・広島・山口』榕樹書林。607p.
- 石塚道子 (1994)「カリブ海地域におけるクレオールアイデンティティ」(黒田悦子編『民族の会合のかたち』朝日新聞社), pp.17-38。
- 石塚道子 (1997a)「クレオールの才覚あるいは変幻自在空間の思想」現代思想25-1, pp.190-199。
- 石塚道子 (1997b)「カリブ海地域小農民女性の地域維持力」(浮田典良編『地域文化を生きる』大明堂), pp.253-278。
- 石塚道子 (2000)「世界化する都市とカリブ海系移民」(五十嵐武士編『アメリカの民族体制』東京大学出版会), pp.269-292。
- 石塚道子 (2000)「カリブ海地域の地域像——ジェンダーの視点から——」熊谷圭知・西川大二郎編 (2000), pp.149-166。
- 石筒 覚 (1998)「マレーシアにおけるインフラストラクチャーの整備と企業立地」経済地理学年報44-1, pp.18-34。
- 石筒 覚 (2000)「クランバレーにおける工業開発戦略と外資系企業の進出」(生田真人・松澤俊雄編 (2000)『アジアの大都市3 クアラルンプル, シンガポール』日本評論社) pp.39-61。
- 石原照敏・中村泰三・藤井宏志・中藤康俊・北村修二・中島茂 (1999)『激動する現代世界』大明堂。
- 岩田修二 (2000)「地域研究を地誌に改造する方法: ネパールを事例に」地誌研年報9, pp.33-46。
- 上田 元 (1997a)「ケニアにおける零細企業群の歴史と理論」アジア経済38-11, pp.50-67。
- 上田 元 (1997b)「ケニアにおける企業形成史とキクユ職人の企業家精神」(篠田隆編『発展途上国の経営変容』未来社), pp.219-254。
- 上田 元 (1998)「零細企業群の経営論理とポピュリズム——ケニア・ニュエリ市におけるジュア・カリ組織化——」(池野旬・武内進一編『アフリカのインフォーマル・セクター再考』アジア経済研究所), pp.19-56。
- 上田 元 (2000)「タンザニア・メル山斜面における人口移動と生業の集落間連関——社会的ネットワークと生業をめぐる試論——」(高根務編『現代アフリカにおける国家, 市場, 農村社会』アジア経済研究所), pp.71-116。
- 上野和彦 (1997)『現代中国の経済地理』大明堂。
- 上村英明 (1999)「北海道における植民地統治と地域史の欠落——アイヌ民族の視点と地域研究——」地域研究論集2-1, pp.37-48。
- 鶴飼止樹 (1996)「社会学・概説」(須藤健一編『ワールドワークを歩く——文科系研究者の知識と経験——』嵯峨野書院), pp.19-23。
- 浮田典良編 (1997)『地域文化を生きる』大明堂。
- 白杵 陽 (1997)「パレスチナ/イスラエル地域研究への序章」地域研究論集1-1, pp.67-91。
- 海津正倫 (1997)「ベンガル低地の地形と自然変化」Tropics 6-3, pp.189-202。
- 梅原弘光 (1995)「フィリピン農村の就業構造」(水野広祐編『東南アジア農村階層の変動』アジア経済研究所), pp.79-110。
- 梅原弘光 (1996)「フィリピン非灌漑地域における灌漑稲作」(堀井健三・篠田隆・多田博編『アジアの灌漑制度——水利用の効率化に向けて——』アジア経済研究所), pp.83-105。
- 梅原弘光 (1997a)「村落レベルでみるフィリピン農地改革の顛末——中部ルソンの改革パイロット村落における事例——」(水野広祐・重富真一編『アジアの経済開発と土地制度』アジア経済研究所), pp.155-198。
- 梅原弘光 (1997b)「東南アジアにおける地域研究法」(藤原健蔵編『地域研究法』(総観地理学講座2) 朝倉書店), pp.98-113。
- 梅原弘光 (1998)「フィリピン農業発展における商人の役割」(加納啓良編『東南アジア農村発展の主体と組織』アジア経済研究所), pp.119-145。
- 梅原弘光 (1999a)「コロナダルの地域概念——ミンダナオ島の地名に関する考察——」史苑 (立教大学史学会) 60-1, pp.119-137。
- 梅原弘光 (1999)「開発入植と地域変化」地理科学54-3, pp.15-26。
- 梅原弘光 (2000)「変貌するフィリピン——近代化政策がもたらしたもの——」熊谷圭知・西川大二郎編 (2000), pp.89-108。
- 江口信清編 (1998)『「貧困の文化」再考』(立命館大学人文科学研究叢書10) 有斐閣。
- 遠藤 元 (1996)「タイ地方経済研究の新たな潮流と問題点——地方実業家をめぐる議論を中心に——」人文地理48-5, pp.27-45。
- 遠藤 元 (1998)「大手流通資本の地方進出と地方流通企業の組織化——バンコク地方都市関係の新たな展開——」(田坂敏雄編『アジアの大都市1・バンコク』日本評論社), pp.163-190。
- 大岩川和正 (1983)『現代イスラエルの政治社会構造——パレスチナにおけるユダヤ人入植村の研究——』東京大学出版会。
- 大阪市立大学地理学教室編 (1996)『アジアと大阪』古今書院。
- 大芝 亮 (1999)「開発援助政策における普遍的アプロ

- ーチと地域性」地域研究論集2-2, pp.7-21。
- 大城直樹・荒山正彦編 (1998)『空間から場所へ——地理学的想像力の探求——』古今書院。
- 大島襄二 (1999)「海の学問としてのオセアニア学」日本オセアニア学会シンポジウム報告。伊豆, 大仁温泉。1999年3月15日。
- 太田 勇 (1998)『華人社会研究の視点——マレーシア・シンガポールの社会地理——』古今書院。
- 応地利明 (1996)「地誌研究と地域研究——認識論的ノート——」(西川治編『地理学概論』(総観地理学講座1)朝倉書店), pp.229-249。
- 応地利明編 (1997)『サヘルとデカンにおけるミレット農耕の比較研究』第2巻 京都大学東南アジア研究センター。
- 岡田俊裕 (1998)「十五年戦争期の米倉二郎」地理科学53-2, pp.1-24。
- 岡田俊裕 (1999)「第2次世界大戦後の米倉二郎」地理科学54-2, pp.19-45。
- 岡橋秀典 (1995)「マディヤ・プラデーシュ州におけるトライブ村落の形成と森林依存経済」(柳沢悠編『暮らしと経済』(叢書カースト制度と被差別民 第4巻)明石書店), pp.257-285。
- 岡橋秀典編 (1997)『インドにおける工業化の新展開と地域構造の変容——マディヤ・プラデーシュ州ピータンプル工業成長センターの事例——』広島大学総合地誌研究資料センター。
- 岡橋秀典 (1999)「デリー首都圏地域における工業団地開発——総合工業団地としてのノイダおよびグレートノイダ地区の開発を中心として——」地誌研年報8, pp.9-31。
- 岡橋秀典編 (1999)『インドにおける工業化の新展開と地域構造の変容』(平成8・9・10年度科学研究費補助金 国際学術研究・学術調査成果報告書)。
- 小野寺 淳 (1997)「中国における土地制度改革と都市形成——珠江デルタ地域, 深圳市の事例から——」アジア経済38-6, pp.26-43。
- 遠城明雄 (1999)「ガーナにおけるく都市インフォーマルセクター」および「く小規模企業」研究について」『人間科学』(九州大学文学部人間科学科) 5: pp.63-84。
- 海田能宏編 (1995)『バングラデシュ農村開発研究——農村発展のための共同研究——』(東南アジア研究33-1)。
- 貝沼恵美 (1999)「フィリピンにおける地域開発政策と地域間格差——公共投資の地域間配分の検討を通じて——」経済地理学年報45-4, pp.53-68。
- 加藤 博 (2000) (学界展望)「シンポジウム『地域研究の現状とイスラーム研究の位置』」アジア経済41-3, pp.64-72。
- 加藤正洋・神田孝治 (1999)「旅と周縁の空間」現代思想27-13, pp.127-141。
- 金坂清則 (1999)「原隆一氏の『沙漠周縁地域』概念について」地域と環境2, pp.55-69。
- 川端基夫 (1999)『アジア市場幻想論——市場のフィルター構造とは何か——』新評論。
- 川元豊和 (1995)「バングラデシュの農業と村落——ボグラ県シルコール村の事例を中心として——」地域学研究8, pp.171-186。
- 川元豊和 (2000)「半島マレーシアにおける地方都市の発展——ジョホール州クルアンを事例として——」地域学研究13, pp.49-63。
- 神田道男 (1999)「フィリピンにおける地域開発戦略の変遷」地理科学54-3, pp.8-14。
- 木下雅夫 (1998)「ホンデラスのバナナプランテーション——その文化社会的意味に関する一考察——」立教大学ラテンアメリカ研究所報27, pp.1-15。
- 木本浩一 (1995)「植民地期インドにおける「王侯都市」の形成——マイソール (Mysore) を事例として——」人文地理47, pp.47-66。
- 木本浩一 (1999)「南インドにおける職人たち——彼らはForgotten Sectorか?——」(村上誠編『現代インドの農村——その四半世紀の変貌——』広島大学総合地誌研究資料センター), pp.159-172。
- 木村 茂 (1998)「北タイ農村の就業形態と農村階層構成の変化——チェンマイ県クランドン村の事例——」地理科学53-1, pp.1-26。
- 金 科哲 (1995)「韓国における農村村人口減少に関する研究の動向と課題」人文地理47-1: pp.21-45。
- 古賀正則, 内藤雅雄, 中村平治編『現代インドの展望』岩波書店。
- 熊谷圭知・塩田光喜編 (1994)『マタンギ・パシフィカ——太平洋島嶼国の政治・社会変動——』アジア経済研究所。
- 熊谷圭知 (1996)「第三世界の地域研究と地誌学——その課題と可能性——」地誌研年報5, pp.35-45。
- 熊谷圭知 (1999a)「近年のポートモレスビーにおける都市移住者の生活様式と首都空間の変容」(塩田光喜編『太平洋島嶼諸国の都市化』アジア経済研究所), pp.17-37。
- 熊谷圭知 (1999b)「第三世界の地域像の再構築と地誌記述の革新」(熊谷圭知編『第三世界の地域像の再構築と地誌記述の革新』平成9～10年度科学研究費補助金研究成果報告書), pp.3-10。
- 熊谷圭知 (1999c)「地域研究とフィールドワーク——私のパプアニューギニア調査研究の反省的考察を通じて——」(熊谷圭知編『第三世界の地域像の再構築

- と地誌記述の革新』平成9～10年度科学研究費補助金研究成果報告書), pp.159-170。
- 熊谷圭知編 (1999)『第三世界の地域像の再構築と地誌記述の革新』平成9～10年度科学研究費補助金研究成果報告書。169p
- 熊谷圭知 (2000a)「特設レポート・地域研究」人文地理52-3: pp.67-71。
- 熊谷圭知 (2000b)「自然との「調和」でもなく、外部への「従属」でもなく——パプアニューギニア、ブラックウォーターの人々の歴史と空間——」熊谷圭知・西川大二郎編 (2000), pp.3-26。
- 熊谷圭知・西川大二郎編 (2000)『第三世界を描く地誌——ローカルからグローバルへ——』古今書院。
- 熊谷圭知・塩田光喜編 (2000)『都市の誕生——太平洋島嶼諸国の都市化と社会変容——』アジア経済研究所。
- 鉢塚賢太郎 (1998)「シンガポールにおける産業構造の変化とオフィス空間の拡大」人文地理50-4, pp.1-23。
- 小池洋一, 坂口安紀, 三田千代子, 遅野井茂雄, 小坂充雄, 福島義和編『図説・ラテンアメリカ——開発の軌跡と展望——』日本評論社, 146p。
- 小島泰雄 (1996)「中国村落の耕地分布の現代的編成」神戸市外国語大学外国学研究年報33, pp.1-27。
- 小島泰雄 (1998)「赤溪客家農村における居住形態」神戸市外国語大学外国学研究41, pp.73-92。
- 小島泰雄 (1999)「中国における1990年代の農村と地理学」神戸市外国語大学外国学研究所研究年報36, pp.1-39。
- 小長谷一之 (1997a)「アジア都市経済と都市構造」季刊経済研究 (大阪市大) 20-1, pp.61-89。
- 小長谷一之 (1997b)「MSC (マルチメディア・スーパー・コリドール) の経済地理学」季刊経済研究 (大阪市大) 20-3, pp.75-100。
- 小長谷一之 (1999a)「都市構造」(宮本謙介・小長谷一之編『アジアの大都市2 ジャカルタ』日本評論社), pp.87-116。
- 小長谷一之 (1999b)「都市システムと企業ネットワーク」(宮本謙介・小長谷一之編『アジアの大都市2 ジャカルタ』日本評論社), pp.203-228。
- 小長谷有紀 (1994a)「モンゴル遊牧社会における経済格差——内モンゴルの草原の事例から——」農耕の技術と文化17, pp.73-100。
- 小長谷有紀 (1994b)「狩猟と遊牧をつなぐ動物資源観」(大塚柳太郎編『資源への文化適応——自然との共生のエコロジー——』(講座地球に生きる3) 雄山閣出版), pp.69-92。
- 小長谷有紀 (1996)『モンゴル草原の生活世界』朝日新聞社。
- 小長谷有紀 (1997)「乳を食すモンゴルの人びと——乳加工体系に見る内在的論理——」(『「もの」の人間世界』岩波文化人類学講座3, 岩波書店), pp.166-204。
- 小長谷有紀 (1998a)『モンゴル遊牧世界』(CD-ROM) テクネ。
- 小長谷有紀 (1998b)「モンゴルの葬送儀礼」国立民族学博物館調査報告8, pp.165-182。
- 小長谷有紀 (1998c)「地図で読むモンゴル」季刊民族学85, pp.34-41。
- 小長谷有紀 (1999a)「草原の国を変えた女性たち——モンゴル——」(窪田幸子・八木祐子編『社会変容と女性——ジェンダーの文化人類学——』ナカニシヤ出版), pp.4-35。
- 小長谷有紀 (1999b)「モンゴルにおける出産期のヒッジ・ヤギの母子関係への介入」民族学研究64-1, pp.76-95。
- 小長谷有紀 (2000)「モンゴル地域研究における記述革新——マルチメディアによる地誌記述の試み——」熊谷圭知・西川大二郎編 (2000), pp.169-186。
- 小長谷有紀編 (1997)『アジア読本・モンゴル』河出書房新社。
- 小長谷有紀・楊海英編著 (1998)『草原の遊牧文明——大モンゴル展によせて——』千里文化財団。
- 小林浩二 (1998)『21世紀のドイツ——旧東ドイツの都市と農村の再生と発展——』大明堂。251p。
- 小林致広 (1995)「インディオという標徴」(小林致広編『メソアメリカ世界』世界思想社), pp.25-65。
- 小林致広編 (1995)『メソアメリカ世界』世界思想社。
- 小林 茂 (1996) (書評) 高谷好一『<世界単位>から世界を見る——地域研究の視座——』人環フォーラム (京都大学大学院人間・環境学研究科) 1, p.58。
- 小林 茂 (1998)「ネパールの低開発と知識人: D.B.ピスタ氏『運命論と開発: 近代化にむけたネパールの闘い』をめぐって」比較社会文化 (九州大学) 4, pp.49-64。
- 小林 茂 (1999)「カトマンズ都市圏の固形廃棄物処理問題」(成田孝三編『大都市圏研究——多様なアプローチ——』(下) 大明堂), pp.309-334。
- 小林康正 (1996)「観察と聞き書きの認識論——私のフィールドワークについて——」(須藤健一編『フィールドワークを歩く——文科系研究者の知識と経験——』嵯峨野書院), pp.84-95。
- 斎藤 功 (1997)「ラテンアメリカにおける地域研究法」(藤原健蔵編『地域研究法』(総観地理学講座2) 朝倉書店), pp.131-156。
- 斎藤 功・矢ヶ崎典隆・須山 聡 (1997)「ブラジル北東部セララ州リマカンボスの中規模灌漑農業」人文地理学研究21, pp.69-91。

- 斎藤 功・松本栄次・矢ヶ崎典隆編 (1999)『ノルデステ—ブラジル北東部の風土と土地利用—』大明堂。
- 崎山正毅 (1996)「歴史学・概説⑤地域史」；「『地域史』のフィールドワーク——あるいは独異なる歴史的存在への接近作業に向けて——」(須藤健一編『フィールドワークを歩く——文科系研究者の知識と経験——』嵯峨野書院), pp.288-290；pp.322-329。
- 佐藤郁哉 (1992)『フィールドワーク——書を持って街へ出よう』新曜社。
- 佐藤哲夫 (1999)「地域研究——『熱帯モンスーンアジア』の稲づくり——」アエラムック『地理学がわかる』朝日新聞社, pp.24-25。
- 佐藤哲夫 (2000)「バンコク郊外における市街地開発の過程」駒澤地理36, pp.13-31。
- 佐藤 宏 (1994)『インド経済の地域分析』古今書院, 155p。
- 佐藤 誠編 (1996)『地域研究調査法を学ぶ人のために』世界思想社。
- 佐藤崇徳・作野広和 (1999)「インド農村調査におけるGISの導入」地誌研年報8：pp.121-142。
- 佐藤廉也 (1995)「焼畑農耕システムにおける労働の季節配分と多様化戦略——エチオピア西南部のマジャンギルを事例として——」人文地理47-6：pp.21-41。
- 佐藤廉也 (1999)「熱帯地域における焼畑研究の展開——生態的側面と歴史的文脈の接合を求めて——」人文地理51-6：pp.47-67。
- 澤 滋久 (1999)「カンボンの変化」(宮本謙介・小長谷 之編『アジアの大都市2 ジャカルタ』日本評論社), pp.231-252。
- 澤 滋久ほか (2000)「特集・ジャカルタ」地理45-2。
- 澤 宗則 (1999a)「グローバリゼーションと開発途上国の都市圏外農村——インドの1農村を事例に——」(村上誠編『現代インドの農村——その四半世紀の変貌——』広島大学総合地誌研究資料センター), pp.139-149。
- 澤 宗則 (1999b)「グローバリゼーションとインド農村のローカリゼーション——ローカルな経済活動と権力構造——」(『南アジアの構造変動：ミクロの視点から』文部省科学研究費・特定領域研究(A)「南アジアの構造変動とネットワーク」総括班, 1999年度国内集会報告集), pp.89-106。
- 渋谷鎮明 (1995)「朝鮮半島における風水地理説を用いた地形認識」歴史地理学37-3, pp.1-15。
- 渋谷鎮明 (1997)「朝鮮(李朝)時代郡懸図の表現方法にみる風水地理的地形認識」歴史地理学39-3, pp.25-38。
- 渋谷鎮明 (1998)「都市計画の実験場としての植民地——朝鮮半島鎮海・扶余の事例——」(大城直樹・荒山正彦編『空間から場所へ——地理学的想像力の探求——』古今書院), pp.58-75。
- 島崎 博 (2000)『中米の世界史』古今書院。
- 島田周平 (1995)「熱帯地方の環境問題を考えるための新視角——脆弱性論とポリティカル・エコロジー論——」(田村俊和・島田周平・門村浩・海津正倫編『湿潤熱帯環境』朝倉書店), pp.67-74。
- 島田周平 (1996)「ナイジェリアの経済変化と食糧生産構造変化」(細見真也・島田周平・池野旬『アフリカの食糧問題』アジア経済研究所), pp.63-149。
- 島田周平 (1997)「アフリカ地域研究法」(藤原健蔵編『地域研究法』(総観地理学講座2)朝倉書店, pp.114-130。
- 島田周平 (1999)「新しいアフリカ農村研究の可能性を求めて——ポリティカル・エコロジー論との交差から——」(池野旬編『アフリカ農村像の再検討』アジア経済研究所), pp.205-254。
- 島田周平編 (2000)『アフリカ小農および農村社会の脆弱性増大に関する研究』科学研究費報告書。
- 杉本尚次 (1996)『地理学とフィールドワーク』晃洋書房。
- 杉本尚次 (1997)「地域文化と変容と伝統文化の再認識——西サモアの事例から——」(浮田典良編『地域文化を生きる』大明堂), pp.226-252。
- 須藤健一編 (1996)『フィールドワークを歩く——文科系研究者の知識と経験——』嵯峨野書院。
- 瀬川真平 (1995)「国民国家を見せる——「うつくしいインドネシア・ミニ公園」における図案・立地・読みの占有——」人文地理47-3, pp.215-236。
- 瀬川真平 (1997)「国家の中の地域文化——インドネシアにおける地域文化の奨励——」(浮田典良編『地域文化を生きる』大明堂), pp.279-300。
- 瀬川真平 (1999)「独立後における景観の変容」(宮本謙介・小長谷之編『アジアの大都市2 ジャカルタ』日本評論社)朝倉書店, pp.57-83。
- 瀬川真平 (2000)「カンボンのジャカルタ——首都再編にさらされて——」熊谷圭知・西川大二郎編 (2000), pp.51-70。
- 祖田亮次 (1999a)「サラワク・イバン人社会における都市への移動とロングハウス・コミュニティの空洞化——」地理学評論72A-1, pp.1-22。
- 祖田亮次 (1999b)「サラワク・イバン人社会における私土地所有観念の形成」人文地理51-4, pp.1-23。
- 高橋健太郎 (2000)「回族・漢族混住農村の社会構造と居住地の形態——寧夏回族自治区納家戸村の事例——」地域学研究13, pp.65-95。
- 高橋真一 (1997)「タイ東北部農村の人口転換——二つ

- の人口レジーム——」人口学研究20, pp.49-63。
- 高谷好一 (1996a)『「世界単位」から世界を見る——地域研究の視座——』京都大学学術出版会。
- 高谷好一 (1996b)『エリアスタディの現状と課題』地誌研年報5, pp.47-57。
- 高山正樹 (2000)『都市経済構造の変化と中間層の成長』(生田真人・松澤俊雄編『アジアの大都市3 クアラルンプル, シンガポール』日本評論社) pp.63-88。
- 竹内啓一 (1998)『地域問題の形成と展開』大明堂。
- 竹内啓一・鈴木薫・加藤博 (1997)『地中海地域における地域研究法』(藤原健蔵編『地域研究法』(総観地理学講座2) 朝倉書店, pp.46-63。
- 田坂敏雄編, 大阪市立大学経済研究所監修 (1998)『アジアの大都市1 バンコク』日本評論社。
- 田村俊和・島田周平・門村浩・海津正倫編 (1995)『湿潤熱帯環境』朝倉書店。
- 立本成文 (1997)『地域研究の構図——名称にこだわって——』地域研究論集1-1, pp.19-33。
- 立本成文 (1999)『地域研究の問題と方法 (増補改定)——社会文化生態力学の試み——』京都大学学術出版会。388p。
- 田和正孝 (1995)『変わりゆくパプアニューギニア』丸善。252p。
- 千葉立也 (1998) (書評) 小林浩二 (1998)『21世紀のドイツ——旧東ドイツの都市と農村の再生と発展——』大明堂。経済地理学年報44-4, pp.137-140。
- 張 志偉 (1996)『アジア都市と大阪の都市政策——都市アイデンティティの反省に向けて——』(大阪市立大学地理学教室編『アジアと大阪』古今書院), pp.214-253。
- 張 (奥野) 志偉編 (1999)『中国の高進技術産業地域と企業』徳山大学研究叢書。
- 月原敏博 (1994)『有畜農業と家畜種——インド、ラダックの農・牧連関——』人文地理46-1, pp.1-21。
- 月原敏博 (1997a)『マリ中央部における在米農法の展開とダム・水路建設——チオンゴニ村周辺の事例をもとに——』(応地利明編『サヘルとデカンにおけるミレット農耕の比較研究』第2巻, 東南アジア研究センター), pp.5-31。
- 月原敏博 (1997b)『ネパール, クンブ地方の家畜構成とその変化——とくにヤクーウシ雑種の生業戦略上の意義について——』(渡部忠世監修, 農耕文化研究振興会編『アジアの農耕様式』(農耕の世界, その技術と文化IV)), pp.57-76。
- 月原敏博 (1997c)『マリ中央部, チオンゴニ村周辺の農法とその変化——サヘル地域の農業近代化手法の再検討——』人文研究 (大阪市立大学文学部) 49, pp.23-51。
- 月原敏博 (1999)『ヒマラヤ地域研究の動向と課題——その人間地生態の把握と地域論の構築に向けて——』人文地理51-6, pp.41-61。
- 東村康文 (1999)『ミャンマー西部国境地域の現状とNGOによる開発協力活動』愛媛の地理14, pp.61-65。
- 土屋健治 (1994)『文化の翻訳——意味空間の成り立ち——』(矢野 暢編『地域研究の手法』(講座 現代の地域研究1) 弘文堂), pp.197-223。
- 坪内良博 (1994)『専門分野と地域研究』(矢野 暢編『地域研究の手法』(講座 現代の地域研究1) 弘文堂), pp.49-69。
- 坪内良博 (1996)『マレー農村の二〇年』京都大学学術出版会。
- 坪内良博 (1998)『小人口世界の人口誌——東南アジアの風土と社会——』京都大学学術出版会。
- 坪内良博編 (1999)『〈総合的地域研究〉を求めて——東南アジア像を手がかりに』京都大学学術出版会。524p。
- 寺坂昭信編 (1994)『イスラム都市の変容——アンカラの都市発達と地域構造——』古今書院。
- 寺坂昭信 (1998a)『トルコをめぐる調査の現状と課題』地誌研年報7, pp.11-26。
- 寺坂昭信 (1998b)『トルコの観光資源とアンタリヤの街並み保存』流通経済大学論集32-4, pp.25-33。
- 杜 国慶 (1997)『中国における都市化と社会経済的地域構造の関連』経済地理学年報42-3, pp.1-14。
- 戸所 隆 (1997)『共同研究による地域研究法——西日本を例に——』(藤原健蔵編『地域研究法』(総観地理学講座2) 朝倉書店), pp.189-207。
- 富山一郎 (1999)『「地域研究」というアリーナ——戦後沖縄研究をめぐる——』地域研究論集2-1, pp.7-17。
- 友澤和夫 (1999)『デリー首都圏における自動車工業の集積とその地域構造——ノイダ, グレーター・ノイダを事例として——』経済地理学年報45-1, pp.1-20。
- 友杉 孝 (1998)『歴史と景観』(田坂敏雄編『アジアの大都市1 バンコク』日本評論社), pp.45-72。
- 友杉 孝編 (1999)『アジア都市の諸相——比較都市論にむけて——』同文館。
- 内藤正典 (1994)『地誌の終焉』法政地理22, pp.32-43。
- 内藤正典 (1996)『アッラーのヨーロッパ』東大出版会。
- 内藤正典 (1997)『多文化・多民族共生のための研究視角』地理学評論70-11。
- 内藤正典 (1998)『イスラム脅威論の虚像と実像』一橋論叢120-4。
- 中生勝美 (1999)『地域研究と植民地人類学』地域研究論集2-1, pp.19-36。
- 中川聡史・佐々井 司・今井博之 (1997)『アジア諸国

- の人口都市化と地球環境」アジア経済38-5, pp.69-77。
- 中里亜夫 (1998)『インドの「白い革命」に関する文献的研究』平成7・8年度科研費報告書。
- 中里亜夫 (1999a)「インドの農村開発としてのオペレーション・フラッド計画」地理科学54-3, pp.41-48。
- 中里亜夫 (1999b)「インドの家畜飼育と草地資源——共有地・放牧地をめぐる——」、『南アジアの構造変動：ミクロの視点から』文部省科学研究費・特定領域研究 (A)「南アジアの構造変動とネットワーク」総括班, 1999年度国内集会報告集, pp.57-87。
- 中里亜夫 (2000a)「小規模井戸灌漑のブラーマン村落の展開」福岡教育大学紀要49, 第2分冊, pp.101-137。
- 中里亜夫 (2000b)「インド農村の貧困と動態——地理教育の偏見とその克服——」熊谷圭知・西川大二郎編 (2000), pp.187-207。
- 中島 茂 (1999)「中東アジア世界」(石原照敏ほか『激動する現代世界』大明堂), pp.83-99。
- 中山修一 (1996)「地誌学と地域研究の在り方に関する日本の解釈の問題」地誌研年報5, pp.77-92。
- 中山修一 (1997a)『近・現代日本における地誌と地理教育の展開』広島大学総合地誌研究資料センター。
- 中山修一 (1997b)「日本における海外地域研究」(藤原健蔵編『地域研究法』(総観地理学講座2)朝倉書店, pp.157-169。
- 中山修一 (2000)「地誌と地理教育——日本の「地誌教育」は何をめざしてきたか?——」熊谷圭知・西川大二郎編 (2000), pp.209-230。
- 永田淳嗣 (2000)「クアラルンプルにおけるマレー人の居住の場とマレーシア社会」(生田真人・松澤俊雄編『アジアの大都市3 クアラルンプル, シンガポール』日本評論社) pp.121-143。
- 成田龍一 (1998)『「故郷」という物語——都市空間の歴史学——』吉川弘文館。
- 西川大二郎 (2000)「地域研究と地誌を結ぶもの——再び地誌学を検討する——」熊谷圭知・西川大二郎編 (2000), pp.231-256。
- 西脇保幸 (1999)『トルコの見方——国際理解としての地誌——』二宮書店。
- 野沢秀樹 (1997)「フランス地理学における地域研究法」(藤原健蔵編『地域研究法』(総観地理学講座2)朝倉書店), pp.31-45。
- 野間晴雄 (1995a)「バングラデシュ村落社会と村落研究——農村開発を指向した研究史展望——」東南アジア研究33-1, pp.115-140。
- 野間晴雄 (1995b)『「農村開発実験」における持続可能性と住民参加——バングラデシュとの研究協力的小括——』奈良女子大学地理学研究報告5, pp.109-141。
- 野間晴雄 (1996)「訥弁な人文地理学からの弁明」総合的地域研究 (文部省科学研究費補助金重点領域研究) 13, pp.12-13。
- 野間晴雄 (1999a)「王権とその背域——東南アジア港市論と水利都市論の拓がりをめぐる——」歴史地理学41-1, pp.44-64。
- 野間晴雄 (1999b)「都市・農村関係モデルとしてのハノイ——都市化とドイモイ以降の農村変化」(成田孝三編『大都市圏研究——多様なアプローチ——』(下)大明堂), pp.279-308。
- 野間晴雄 (1999c)「開発における村落と地方自治体リンクの可能性——バングラデシュ・ベトナム・中国・日本の経験から——」地理科学54-3, pp.203-213。
- 朴 琮玄 (1995)「航空旅客の流動からみた国際的都市システム——日本の地方都市とアジア諸都市との結合関係：福岡に注目して——」経済地理学年報41-2, pp.53-61。
- 朴 琮玄 (1997)「大邱企業の対日輸出における日本側港湾の選択要因」経済地理学年報43-4, pp.35-50。
- 橋本征治 (1998)「太平洋地域におけるタロイモ栽培の比較研究」(橋本征治編『現代社会と環境・開発・文化——太平洋地域における比較研究——』関西大学出版部), pp.217-255。
- 橋本征治編 (1998)『現代社会と環境・開発・文化——太平洋地域における比較研究——』関西大学出版部。338p。
- 幡谷則子 (1999)『ラテンアメリカの都市化と住民組織』古今書院。
- 原 隆一 (1997)『イランの水と社会』古今書院。
- 久武哲也 (1999/2000)「ハワイは小さな満州国」現代思想27-13, pp.196-204; 28-1, pp.60-82。
- 福島義和 (1995)「第三世界の地域研究の現在——地理学のもう一つの道——」社会科学年報 (専修大学社会科学研究所) 29, pp.63-79。
- 福島義和 (1999)「ブラジル・クリチバ市の都市環境政策——脱クルマ社会と都市環境政策——」宇大地理2, pp.106-111。
- 藤田佳久 (2000)『東亜同文書院 中国大調査旅行の研究』(愛知大学文学会叢書5) 大明堂。
- 藤田佳久編著 (1994)『中国との出会い——東亜同文書院・中国調査旅行記録』第1巻, 大明堂。
- 藤田佳久編著 (1995)『中国を歩く——東亜同文書院・中国調査旅行記録』第2巻, 大明堂。
- 藤田佳久編著 (1998)『中国を越えて——東亜同文書院・中国調査旅行記録』第3巻, 大明堂。
- 藤田佳久編著 (1999)『中国を記録する——東亜同文書院・中国調査旅行記録』第4巻, 大明堂。
- 藤巻正己 (1996)「多民族都市クアラルンプルのスクォーター・スラム社会——都市下層の生きられる空間

- 」(藤巻正己・住原則也・関雄二編『異文化を「知る」ための方法』古今書院) pp.56-71。
- 藤巻正己(1998)「クアラルンプルの生きられたスクォーター・カンボン——1980年代マレーシア都市下層社会の風景——」(江口信清編『「貧困の文化」再考』(立命館大学人文科学研究叢書10)有斐閣) pp.113-176。
- 藤巻正己(2000a)「[覚書]クアラルンプル都市下層民に対する「外部者」の眼差し——新聞記事に書かれた都市下層民衆像——」(山本勇次編『スラム地区住民の適応に関する比較研究』(平成10～11年度科学研究費補助金研究成果報告書) pp.73-100。
- 藤巻正己(2000b)「1990年代クアラルンプルのスクォーター問題と再定住政策」(生田真人・松澤俊雄編『アジアの大都市3 クアラルンプル, シンガポール』日本評論社) pp.91-120。
- 藤巻正己・住原則也・関雄二編(1996)『異文化を「知る」ための方法』古今書院。
- 藤原健蔵(1997)「地誌研究とフィールドワーク」(藤原健蔵編(1997)『地域研究法』(総観地理学講座2)朝倉書店) pp.1-30。
- 藤原健蔵編(1997)『地域研究法』(総観地理学講座2)朝倉書店。
- 古川久雄(1998)「生態論理と地域研究」地域研究論集1-2, pp.31-44。
- 平戸幹夫(2000)「人口と産業・職業の構成」(生田真人・松澤俊雄編(2000)『アジアの大都市3 クアラルンプル, シンガポール』日本評論社) pp.147-171。
- 堀 信行(1996)「地誌学的思考と地誌学の可能性」『地誌研年報』5, pp.9-19。
- 堀 信行(1997)「風土の三角形——生きられる「場所」の誕生——」(福井勝義編『環境の人類誌』岩波講座文化人類学 第2巻), pp.79-106。
- 堀 信行(1999)「問題提起——『開発の三角形』の祝座から——」地理科学54-3, pp.4-7。
- 堀信行・奥村晃史・木本浩一ほか(1999)「シンポジウム「途上国開発と地理学」——1998年度秋季学術大会シンポジウム——」地理科学54-3, pp.1-83。
- 米田 巖(1997)「外国人による日本地域研究」(藤原健蔵編『地域研究法』(総観地理学講座2)朝倉書店, pp.208-228。
- 前田俊二(1995)「インド・ワラーナシー市周辺農村の人口特性——チライガオン村とカルダハ市の比較を通して——」地理科学50-4, pp.250-271。
- 松田素二(1996)『都市を飼う慣らす——アフリカの都市人類学』河出書房新社。290p。
- 松原正毅(1997)「地域研究序説」地域研究論集1-1: pp.6-18
- 松本栄次(1995)「ブラジル北東部大西洋沿岸地域の開発と環境変化」(田村俊和・島田周平・門村浩・海洋正倫編『湿润熱帯環境』朝倉書店), pp.146-175。
- 松本博之(1997a)「言葉と自然——生態から風景への序説——」地理学報(大阪教育大)32, pp.11-23。
- 松本博之(1997b)『「潮時」の風景——自然と身体——』地理学報(大阪教育大)32, pp.25-59。
- 松本博之(2000)「トレス海峡諸島の地域社会——植民地システムと住民——」熊谷圭知・西川大二郎編(2000), pp.109-130。
- 松村嘉久(1997)「中国における民族自治地方の成立過程と展開——国家形成をめぐる民族問題——」人文地理49-4, pp.21-42。
- 松村嘉久・辻本雄紀(1999)「中国におけるツーリズムの発展と政策」東アジア研究26, pp.15-38。
- 松村嘉久(2000)「祖国中国をいかに見せるのか——観光, スペクタクル, 中華民族主義——」中国研究月報623, pp.1-26。
- アリソン・マレー(熊谷圭知・内藤耕・葉倩瑋訳)(1994)『ノーマネー・ノーハネー——ジャカルタの女露天商と売春婦たち——』木犀社。
- 三木理史(1999)「移住型植民地樺太と豊原の市街地形成」人文地理51-3, pp.1-23。
- 水内俊雄(1996)「人文地理学・概説」(須藤健一編『フィールドワークを歩く——文科系研究者の知識と経験——』嵯峨野書院), pp.331-335。
- 水野 勲(1998)「地域における経験的規則性と固有性の緊張関係——計量地理学における韓国研究を通して——」お茶の水地理39, pp.1-12。
- 水野広祐(1999a)『インドネシアの地場産業——アジア経済再生の道とは何か?』京都大学学術出版会。
- 水野広祐(1999b)「土地問題と土地紛争」(宮本謙介・小長谷 之編『アジアの大都市2 ジャカルタ』日本評論社), pp.253-279。
- 南埜 猛(1999)「インドにおける都市化・工業化と農民の対応——デリー大都市圏農村の事例——」地誌研年報8, pp.87-119。
- 南埜 猛(2000)「インドの地理情報と土地データ」兵庫大学研究紀要20, pp.147-161。
- 宮本謙介・小長谷 之編、大阪市立大学経済研究所監修(1999)『アジアの大都市2 ジャカルタ』日本評論社。
- 村上 誠編(1999)『現代インドの農村——その四半世紀の変貌——』(総合地誌研 研究叢書34)広島大学総合地誌研究資料センター。179p。
- 森川 洋(1992)「地誌学の研究動向に関する一考察」地理科学47-1, pp.15-35。
- 森川 洋(1996)「地誌学の問題点——エリアスタディとの関連において——」地誌研年報5, pp.1-8。

- 森川 洋 (1995)『ドイツ——転機に立つ多極分散型国家——』大明堂。
- 森本 泉 (1998)「ネパール・ポカラにおけるツーリストエリアの形成と民族「企業家」の活動」地理学評論 71-4, pp.272-293。
- 森本 泉 (1999)「国際ツーリズムにおける『文化の商品化』とアイデンティティ——ネパール, ポカラにおけるチベット人家族を事例として——」人間文化論叢 (お茶の水女子大学) 1, pp.35-43。
- 森本 泉 (2000)「ネパール地域像の再構築の試み——楽士カースト集団ガンダルバの表象と実践——」熊谷圭知・西川大二郎編 (2000), pp.131-148。
- 矢野 暢 (1994)「地域研究とは何か」(矢野 暢編『地域研究の手法』(講座 現代の地域研究1) 弘文堂), pp.3-22。
- 矢野 暢編 (1994)『地域研究の手法』(講座 現代の地域研究1) 弘文堂。
- 矢ヶ崎典隆 (1997)「アメリカ合衆国における地域研究法」(藤原健蔵編『地域研究法』(総観地理学講座2) 朝倉書店), pp.64-80。
- 山下清海 (1996)「福建省における華僑送出地域と(僑郷)の地理学的考察——その地域的特色と移住先との結びつき——」(可児弘明編『僑郷 華南——華僑・華人研究の現在』行路社), pp.38-55。
- 山下清海 (1998)「東南アジア華人の食文化に関する地理学的考察——シンガポール・マレーシアを中心に」国際地域学研究 (東洋大学) 創刊号, pp.121-31。
- 山本健児 (2000)『国際労働力移動の空間』古今書院。
- 山本勇次編 (2000)『スラム地区住民の適応に関する比較研究』(平成10～11年度科学研究費補助金研究成果報告書)。
- 八木浩司 (1999)「ネパール・低ヒマラヤ帯における斜面災害低減にむけての試みとインフラ開発」地理科学 54-3, pp.27-32。
- 葉 倩瑋 (1994)「日本植民地時代における台北の都市計画——統治政策と都市空間構造の変化——」経済地理学年報40-3, pp.202-219。
- 吉野正敏 (1997)「『熱帯中国——自然そして人間』古今書院, 388p。
- 李 禧淑 (1997)「韓国における氏族マウル住民の移住と適応——ダム建設にともなう移住民・全州柳氏を事例として——」人文地理49-3, pp.1-19。
- 若林香名 (1998)「韓国社会と外国人労働者問題」お茶の水地理39, pp.75-86。
- Ajiki, Kazuhiro (1999) The human impact on mangrove forest in southern Thailand: Findings from field survey on Changwat Satun and Krabi. *Tropics* 8, pp.233-237。
- Hirai, Yukihiro, Sato, Tetsuo and Tanavud, Charlchai (1999) Assessment of impacts of sea level rise on coastal lagoons: case studies in Japan and Thailand. *Regional Views* (地域学研究) 12 (Institute for Applied Geography, Komazawa Univ.), pp.33-45。
- Kim, Doo-Chul (1999) Can local government substitute for rural community? : An alternative framework for rural development in the context of the East Asia, *Geographical Review of Japan* (ser. B) 72-2, pp.100-110。
- Komoguchi, Yoshimi (1995) Socio-economic changes in FELDA: a case study of Felda Ayer Hitam, Johor state, Malaysia, *Regional Views* (地域学研究) 8, pp.89-113。
- Komoguchi, Yoshimi (1996) Migration and changing occupation patterns of FELDA's settlers in Malaysia: a case of Felda Ayer Hitam, Johor State, *Regional Views* (地域学研究) 9, pp.63-86。
- Konagaya, Yuki (1995) Characteristics of the nomad in the context of civilization theory. In Umesao, T., Befu, H. and Ishimori, S. eds. *Japanese Civilization in the Modern World IX : Tourism, Senri Ethnological Studies* 38, pp.125-139。
- Kumagai, Keichi (1998a) Japanese geographers and their studies on the Third World after the Second World War: A Critical Review. *Geographical Review of Japan* (ser.B) 71-1: pp.1-30。
- Kumagai, Keichi (1998b) Migration and shifting settlement patterns among the Kapriman people of East Sepik province, Papua New Guinea. In Yoshida, Shuji and Toyoda, Yukio (eds.) *Fringe Area of Highlands in Papua New Guinea. Senri Ethnological Studies* 47. pp.43-60。
- Matsumoto, Eiji (1994) Degradation of geo-ecosystems and formation of white sand in Northeastern Brazil. *Geographical Review of Japan* (Ser. B) 67, pp.50-62。
- McGee, T.G. and Ira M. Robinson eds. (1995) *The Mega-Urban Regions of Southeast Asia*, UBC Press。
- Minamino, Takeshi (1995) Water and its management for better living in the Bengal Delta: A case study of Radhaballavpur village, *Annual Report of Research Center for Regional Geography* 4, pp.43-57。
- Minamino, Takeshi (1997) Water use and caste community in a South Indian village: A case study of Chikkamaralli village, *Annual Report of Research Center for Regional Geography* 6, pp.73-92。
- Nagata, Junji (1995) Notes on land title of Mukim Sungai Punggor, Rengit Johor, *Regional Views* (地域学研究) 8, pp.75-87。
- Nagata, Junji (1999) Roots of the Malay communities of two selected villages in Western Johor, Malaysia. *Komaba*

- Studies in Human Geography* 13: pp.55-81.
- Nakagawa, Satoshi (1996) Spatial Structure of Bangkok Metropolis, *Regional Views* (地域学研究) 9, pp.11-22.
- Nakagawa, Satoshi (1997) Residents in suburban area of Bangkok Metropolis: classification by migratory and social characteristics. *Regional Views* (地域学研究) 10, pp.45-59.
- Nakayama, Shuichi (1996) A study of the system of decision making by local government authorities and the people concerning the rural development in India: A case study in Pandavapura Taluk in South India. In *Geographical Reappraisal of Human Resources and Its Impact on Regional Development in India*, Research Center for Regional Geography, Hiroshima University, special publication 26, pp.5-12.
- Nonaka, Kenichi (1996) Ethnoentomology of the Central Kalahari San. *African Study Monographs*, Suppl. 22: pp.29-46.
- Okuno, Shii (Cheung, Chiwai) (1999) Urban policies of some port-cities in the Asia-Pacific Region. In Chapman, G., Dutt, A.K. and Bradnock, R.W. eds. *Urban Growth and Development in Asia, vol.II: Living in Cities*, Aldershot, Ashgate, pp.426-439.
- Onodera, Jun (1998) Industrial restructuring in Hong Kong and its extension to the Pearl River Delta Region, China. *The Science Reports of the Tohoku Univ. 7th series (geography)* 48-1/2, pp.21-48.
- Onodera, Jun (1999) A mechanism of urban formation in developing Asia: A case of the Pearl River Delta region, China. *Geographical Review of Japan*. 72 (ser. B) 2, pp. 111-121.
- Sato, Ren'ya (1997) Christianization through villagization: experiences of social change among the Majangir. In Fukui, K., Kurimoto, E. and Shigeta, M. (eds.) *Ethiopia in Broader Perspective* (Papers of the XIIIth International Conference of Ethiopian Studies). Kyoto, Shokado.
- Satoh, Tetsuo (1996) Reproductive behavior of suburban residents in Bangkok. *Regional Views* (地域学研究) 9, pp. 23-33.
- Satoh, Tetsuo (1997) Population change and CO₂ emission in Thailand, *Regional Views* (地域学研究) 10, pp.21-33.
- Shimada, Shuhei ed. (1995) *Agricultural Production and Environmental Change of Dambo: A Case Study of Chinena Village, Central Zambia*. Tohoku Univ, Univ. of Zambia.
- Teiji Watanabe (1997) Estimates of the number of visitors impacting forest resources in the Nepal Himalaya, *Quarterly Journal of Geography* (季刊地理学) 49, pp.15-29.
- Terasaka, Akinobu and Mizuuchi, Toshio eds. (1998) *Geographical Views in the Middle Eastern Cities VI, Migration & Ankara*. part 2, Ryutsu Keizai University.
- Tomosugi, Takashi (1995) *Changing Features of A Rice-Growing Village in Central Thailand from 1967 to 1993*, The Centre for East Asian Studies for Unesco.
- Yoshida, Shuji and Toyoda, Yukio eds. (1998) *Fringe Area of Highlands in Papua New Guinea*. *Senri Ethnological Studies* 47.

くまがい・けいち

お茶の水女子大学助教授